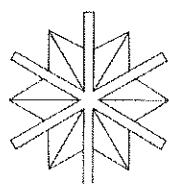


令和7年度



研 究 紀 要

第42号

秋田県立本荘高等学校

目 次

巻 頭 言	校 長 高 橋 司	2
 <全日制課程>		
授業改善		
校内研修計画	研 修 班 佐々木 英 憲	4
 校内研究授業 10月16日(木) 指導主事学校訪問		
2年 論理国語 「説明のプロになろう」	国 語 科 藤 原 直 哉	5
2年 世界史探究 「イスラーム教の成立とヨーロッパ世界の形成」	地歴公民科 關 友 明	15
2年 物理基礎 「気柱の共鳴」	理 科 飛 澤 一 斗	24
 授業アンケート	 研 修 班 山 田 樹	 34
 研修報告		
基本研修		
初任者研修講座	令和7年度初任者研修を終えて 地歴公民科 畠 山 幸 大	42
	令和7年度初任者研修を終えて 英 語 科 櫻 田 隆 輝	46
中堅教諭等資質向上研修講座	令和7年度中堅教諭等資質向上研修を終えて	
	国 語 科 藤 原 直 哉	49
実践的指導力発展研修講座	総合教育センター研修 A-25 実践的指導力発展研修講座	
	理 科 中 村 真 紀 子	53
県立学校新任教務主任研修講座	県立学校新任教務主任研修を終えて	
	理 科 櫻 庭 明 央	54
学年主任研修	高等学校新任学年主任研修講座について 保健体育科 長谷部 亮	56
高等学校新任道徳教育推進教師研修講座	道徳教育の現状と推進のための取組みについて	
	数 学 科 小 澤 寿 美 人	60
 <定時制課程>		
授業改善		
分掌経営計画	研 修 部 齊 藤 芳 徳	63
授業改善重点事項	研 修 部 齊 藤 芳 徳	64
授業アンケート	研 修 部 山 岸 幸 希	66
 研修報告		
	ライフスキルとソーシャルスキルの向上を目指した取組みについて	
	支 援 員 会 佐々木 奈緒子	72
 研究発表		
秋田県高等学校校定時制通信制教育研究大会 第3分科会(進路指導)より		
他者との関わりをとおして未来を切り拓く力を養う取組み	進路指導部 夏 井 雅 子	75
 編集後記		 78

探究的な学びを通して、問いを発し課題を解決する力を育てる

校長 高橋 司

令和7年9月5日、文部科学省は次期学習指導要領の改訂に向けた重要な方針を示す「論点整理（素案）」を公表しました。これは、これからの子どもたちの学びや学校生活がどのように変化していくのかを示す、一つの「地図」であると受け止めています。その中では、主体的に学び、自らの人生を舵取りする力の育成や、多様で豊かな可能性を開花させるためには、質の高い探究的な学びの実現が不可欠であることが示されています。

高校においては、現行の学習指導要領が令和4年から本格実施されていますが、社会はそれ以上のスピードで変化しています。AI やロボット、情報通信技術の進展、グローバル化の加速により、将来を見通すことが難しい時代となりました。特に生成 AI の急速な進歩は、私たちの生活や仕事の在り方を大きく変えつつあります。今ある職業が生成 AI の活用やロボットにより代替される一方で、新たに職業が生み出される可能性もあります。

このような時代において生徒に求められる力は、単に「正解を早く得る力」だけではありません。新たな価値を生み出す創造力、一つのことにと粘り強く向き合い、深く掘り下げる力、そして地域や身近な課題を発見し、他者と協力しながら解決していく力であると考えます。そのためには、自ら問いを見つけ、考え、調べ、深めていく学びが重要です。また、答えのない課題に対して、他者と協働しながら解決策を模索し、粘り強く挑戦する経験を重ねることが必要であると考えます。

本校では、令和7年度の授業改善を推進する具体的取組の一つとして、思考力・判断力・表現等の育成を通じた「問いを発する生徒」の育成を掲げています。どのようにそれを実現していくのか学校全体で検討を重ねた結果、「問題」を発見し、他者との関わり合いを通して課題を解決していく力の育成が、これからの本校にとって重要であるとの共通理解に至りました。

【学校の重点課題】

「考える力」を養い、課題解決力の育成につなげる授業改善

【手立て】

- ・自分の考えを、根拠をもって表現できる活動の工夫
- ・思考を深める発問や対話・協働的な活動の工夫

各教科の授業においては、基礎的な力を確実に身につけさせることを土台としつつ、「なぜ?」「本当にそうなのか?」「他に方法はないのか?」といった問いを通して、生徒の思考を深める授業づくりが求められます。また、一人一台タブレット端末を活用し、情報を共有したり、思考の過程を可視化したりすることで、協働的・対話的な学びをより効果的に展開することも可能です。

本校の教育方針である「未来を切り開く人間力を高め、社会に貢献する人材を育成する」を実現するためには、各教科の授業を通して、生徒が自分の考えをしっかりと持ち、多様な意見や価値観を受け止めながら、多角的に物事を捉えられる力を育てていくことが不可欠です。

教職員一人一人の授業改善の積み重ねこそが、生徒の課題解決力の育成につながります。各教科の授業改善、校内相互授業参観や校内外の研修で学んだことを互いに共有し、研究紀要にまとめた研修の成果も生かしながら、本校の教育をさらに前進させていきたいと考えています。日々の教育活動を通して、教職員の皆さんとともに、これからの学校づくりに取り組んでいけることを期待しています。

全 日 制 課 程

令和7年度 分掌経営計画（教務部・研修班）

1 目標・重点事項

目 標	重 点 実 施 事 項
授業力・指導力の向上に組織的・継続的に取り組むことのできる支援体制を確立させる。	1 組織的な教材研究や教授法研究への取り組みを推進する。 2 教科を超えた横断的相互授業の参観と授業研修を推進する。 3 『研究紀要』の内容充実を図り、知的財産の構築を図る。

2 構成員及び業務分担

構成員	◎佐々木英憲 加茂 玲子 山田 樹
-----	-------------------

業務区分	業 務 内 容	担 当 者
総 務	総括（企画・調整）	◎佐々木
職員研修	各種研究会、講習会申し込み	○佐々木、加茂
	校内職員研修、公開研究授業実施計画	○佐々木、全員
	初任研、経験年次別研修、中堅教員研修など	○佐々木
教育実習	教育実習関係事務、教育実習生指導	○佐々木、加茂
研究紀要	研究紀要の発刊計画、編集、関係事務	○加茂、佐々木
各種調査	授業アンケート（年2回）、学校評価	○山田、佐々木

3 業務計画

学期	月	業 務 等
1	4	・業務分担、年間計画、目標、運営方針 ・秋田県総合教育センター研修講座申し込み ・秋田県高等学校教育研究会会員登録 ・初任者研修計画等作成 ・中堅教員研修計画等作成 ・今年度教育実習受け入れ準備 ・経験年次別研修計画等作成 ・来年度教育実習生受付
	5	・校内研修会（全体研修テーマ・授業研究会・職員研修会）計画 ・教育実習生指導（オリエンテーションを含む） ・第1回相互授業参観
	6	・授業研修の推進
	7	・授業研修の推進、第1回授業アンケート
2	8	・授業研修の推進
	9	・授業研修の推進
	10	・公開研究授業（兼）第2回相互授業参観
	11	・『研究紀要』の立案
	12	・『研究紀要』の原稿依頼、第2回授業アンケート
3	1	・『研究紀要』の原稿締切
	2	・『研究紀要』の原稿編集
	3	・『研究紀要』の発行 ・各種調査の整理と1年間の総括

国語科（論理国語）学習指導案

日 時 : 令和7年10月16日(木) 5校時
 場 所 : 2年C組教室
 対 象 : 2年C組 28名
 指 導 者 : 教諭 藤原 直哉
 教 科 書 : 『高等学校 論理国語』数研出版

1 単元(題材)名

説明のプロになろう

2 単元(題材)の目標

- (1) 文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など、文章の構成や展開の仕方について理解を深めることができる。(知識及び技能)(1)エ
- (2) 文章の構成や展開、表現の仕方などについて、自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることができる。(思考力、判断力、表現力等)A書くこと(1)カ
- (3) 的確に伝えるために文章の構成や展開、表現の仕方に着目して推敲することに向けて、粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

3 生徒と単元(題材)

(1) 単元(題材)観

本単元では、どのような筋道や順序で書くかについて学ぶ。この学びは、たとえば、報告書などを書く際に、手順や事実を効果的に説明することに生かすことができる。生きて働く学力として身に付けさせたい。

(2) 生徒観

文型のクラスである。意欲をもって学習に取り組み、学習内容の定着も良好である。外部模試では、昨年度比で、国語の正答率が7.4ポイント高い。1学期の「書くこと」の学習にも進んで取り組む様子が見られた。

(3) 指導観

エラーモデルを添削する言語活動と、自らがテーマを決めて文章を書く言語活動を設定した。

4 本校の重点課題との関わり

重点課題「考える力」を養い、課題解決力の育成につなげる授業改善」

- ・エラーモデルを添削する言語活動では、問題点を見付け、根拠を挙げて訂正させる。
- ・自らがテーマを決めて文章を書く言語活動をはじめ、様々な場面でペアワークやグループワークを取り入れる。

5 単元(題材)の指導計画 (総時数2時間)

- (1) 手順の説明、配置の説明 …… 1時間(本時1/1)
- (2) 意見の説明 …… 1時間

6 単元(題材)の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など、文章の構成や展開の仕方について理解を深めている。	「書くこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方などについて、自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりしている。	的確に伝えるために文章の構成や展開、表現を仕方に着目して推敲することに向けて、粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとしている。

7 本時の計画 (本時 1/2時間)

(1) 本時の目標

手順や配置の説明を効果的に文章に書くことができる。(思考力、判断力、表現力等)

(2) 展開

段階	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 「これ何してる?ゲーム」の映像を視聴し、伝わる説明がどのようなものか、問いをもつ。 本時の目標と授業の流れを確認し、見直しをもつ 	個人 ↓ ペア 一斉	<ul style="list-style-type: none"> 説明はなぜ伝わらなかったのか考えさせ、説明の仕方について関心をもたせる。 本時の目標は板書する。本時の流れはスライドで投影する。 		
展開 37分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ワーク1 「カップ焼きそばの作り方」に取り組む。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 手順の説明について理解する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ワーク2 「国旗を描く」に取り組む。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 配置の説明について理解する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ワーク3 「説明にチャレンジ」に取り組む。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 選んだテーマに従い、「手順の説明」または「配置の説明」を用いて説明を書く。 ペアで相互評価する。 全体で共有する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>発問 どのような工夫をしたか。 <生徒への支援> 「手順」「配置」などの言葉を用いさせる。それでも言語化できない場合は、文章を読み上げ、工夫している点を他の生徒に見つけさせる。(読み上げる前には本人の承諾を得る)</p> </div>	個人 ↓ ペア 一斉	<ul style="list-style-type: none"> 時間的な順序に従って説明していないことに気付かせる。 全体から部分へ、という順に説明していないことに気付かせる。 A「私の得意な〇〇のコツ」は、「手順の説明」を、B「私の〇〇の中」は「配置の説明」を用いることに気付かせる。 コメントを書かせる。 指名し、発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 筋道や順序を工夫して、効果的に伝わる文章を書いている。(思考・判断・表現) 	<ul style="list-style-type: none"> 記述の分析
まとめ 8分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>発問 「伝わる説明」を書く上でどのような工夫が必要か。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 本時の学習を振り返って記述する。 	個人	<ul style="list-style-type: none"> 学習用語を用いて記述するよう指導する。 		

(表面)

説明のプロになろう

目標 手順や順序の説明を効果的に文章に書くことができる。

年 組 番 氏 名

ワーク1 カップ焼きそばの作り方

カップ焼きそば「ピュアース」の作り方

まず、カップの蓋を取り、ふたを半分開きます。次に、カップの中に入っている「かやく」「ソース」「ふりかけ」の小袋を取り出します。そして、鍋をちやんと洗いで、フタを閉めます。3分間経ったら、ふたの湯切り口を放して、お湯を捨てます。最後に、鍋に小袋の「ソース」を加えて、全体に絡めます。お好みで小袋の「ふりかけ」をかけて完成です。「かやく」はお湯を注ぐ前に入れてください。

問1 右の説明の問題点はありますか。次の「例」のように記入しなさい。

例 私は水缸を傾けています。どんな水缸かと言ったら、水缸にはいろいろな種類があるから、最後の「ソフト・ドリンク」が正しいです。

ワーク2 手順の説明

ワーク2 国旗を描く

説明1

国旗の色は、赤と青と白の三色です。横は三等分になっています。

説明2

国旗の形は、縦長の長方形で、その比率は、縦を2、横を3とします。横は縦の1.5倍で、三本の線の幅は均等です。色は左から、青、白、赤です。

問1 「説明1」を読んで、国旗を描きなさい。

問2 「説明2」を読んで、国旗を描きなさい。

問3 「説明1」と「説明2」には説明の先後にどのような違いがありますか。簡潔書きなさい。

ワーク3 順序の説明

実践報告

授業者としては、講義により一方的に教え込むのではなく、生徒が考え、話し合い、気付いていく授業を目指した。そこで、生徒にエラーモデルを提示し、誤りを指摘させることで、学びを得る単元を計画した。ここでいう「エラーモデル」とは誤謬を含んだ文章を指す。エラーモデルは大変有効だが、用いる際には注意すべきことがある。その注意点については本報告の「2. 末尾」の項目で詳述する。

以下、授業の展開部分で行った「ワーク1」「ワーク2」「ワーク3」について報告し、実践に対する考察を述べる。

1. 実践報告

(1) ワーク1 カップ焼きそばの作り方

ワーク1は、【表1】に示す学習事項を身に付けさせることを意図している。

【表1】 ワーク1で気付かせたい学習事項

- | |
|--|
| ア. 説明では、できるだけ誤解のない具体的な表現を用いる。
イ. 手順に関する説明は、時系列に沿って書く。 |
|--|

ワーク1では、カップ焼きそばの手順についての説明文を生徒に提示し、誤っている箇所に傍線を付し、訂正するように指示した。この説明文はエラーモデルであり、訂正すべき表現を2箇所設けてある。説明文を以下に示す。

カップ焼きそば「ベゴーン」の作り方

まず、カップの包装を取り、ふたを半分剥がします。次に、カップの中に入っている「かやく」「ソース」「ふりかけ」の小袋を取り出します。そして、熱湯をちゃんと注いで、フタを閉めます。3分間経ったら、ふたの湯切り口を使って、お湯を捨てます。最後に、麺に小袋の「ソース」を加えて、全体に絡めます。お好みで小袋の「ふりかけ」をかけて完成です。「かやく」はお湯を注ぐ前に入れてください。

訂正すべき箇所の1つ目は、「熱湯をちゃんと注いで」の部分である。この部分を「カップの内側の線まで」や「熱湯を〇〇ml注いで」など具体的な表現に訂正し、説明で用いるべき表現（【表1】のア）について気付かせることを意図している。2つ目は、「『かやく』はお湯を注ぐ前に入れてください。」が末尾にあることである。訂正以前の説明の通りに焼きそばを作るのであれば、「かやく」を入れたまま熱湯を注いでしまうことになる。この部分を末尾から「カップの中に入っている『かやく』『ソース』『ふりかけ』の小袋を取り出します。」の直後に挿入するように訂正させ、手順の説明の順序（【表1】のイ）について気付かせることを意図している。

授業では、ワークに取組ませて約2分間が経過した時点で、すべての生徒がこの2点を指摘していた。ワークシートの振り返りの記述からも、授業者の意図している通りの気づきを得ていることが認められた。

ただし、他クラスで行った授業では、授業者の意図していなかった「誤り」が指摘されることがあった。他クラスでは、提示した説明文の一文を「まず、カップの包装を取り、ふたを剥がします。」としていた。この記述について、「剥がすのは全部か半分か」という指摘を生徒から受けた。あいまいで訂正すべき表現であることを認め、望ましい表現について教室で考える時間を設けた。意図しない「誤謬」が指摘されないよう、丁寧に文章を作成するのが授業者の務め

だとは思ふ。それでも生徒は「誤謬」を見つける。意図しない「誤謬」への指摘も含めて、学びへと誘うきっかけとしたものである。

(2) ワーク2 国旗を描く

ワーク2は、【表2】に示す事項について生徒が気付いて理解することをねらいとして実施した。

【表2】 ワーク2で気付かせたい学習事項

- | |
|--|
| <p>ア. 説明では、できるだけ誤解のない具体的な表現を用いる。</p> <p>イ. 説明がどのような視点からなされているのかを示す。</p> <p>ウ. 空間配置に関する説明は、全体的なものから部分的なものへという順序で書く。</p> |
|--|

【表2】のアはワーク1で学習したことの確認、イとウはワーク2で新たに学ぶ項目である。特にウは、次時につながる、ワーク2の核心となる学習事項である。

ワーク2では、国旗についての説明文、【説明Ⅰ】と【説明Ⅱ】を用いた。【説明Ⅰ】がエラーモデルである。【説明Ⅰ】と【説明Ⅱ】を以下に示す。

【説明Ⅰ】

国旗の色は、赤と青と白の三色です。縦に三等分になっています。

【説明Ⅱ】

国旗の形は、横長の長方形で、その比率は、縦2、横3です。模様は縦^{たてじま}縞で、三本の縞の幅は均等です。色は3色で、左から青、白、赤です。

ワーク2は次のように実施した。まず、【説明Ⅰ】を読んで国旗を描き、描いた国旗を4人グループで見せ合わせた。どのグループでも、縦縞のものや横縞ものが混在し、色の配置にも異なりがあった。生徒は、【説明Ⅰ】が説明として適当ではないことを理解したようである。次に、【説明Ⅱ】を読んで国旗を描き、描いた国旗をグループで見せ合わせた。どの生徒のワークシートにもフランス国旗が描かれ、【説明Ⅱ】が望ましい説明であることを生徒と確認した。そして、【説明Ⅰ】と【説明Ⅱ】の説明の仕方の違いについて考えさせ、箇条書きでワークシートに記述させた。最後に、ワークシートの記述をペアで交流させた。

【表3】は、ワーク2における生徒の記述をa～eの5つに分類し、同じ趣旨の記述をした生徒数とその出席者に占める割合を示したものである。なお、「学習内容」の項目は、ワークシートの記述の分類が【表2】に示す学習内容との対応を示している。

【表3】 ワーク2における生徒の記述

ワークシートの記述分類	学習内容	割合 (%)
a. 【説明Ⅱ】は、縦横か横縦かが具体的に示されている。	ア	58.3
b. 【説明Ⅱ】は、形の比率が具体的に示されている。	ア	66.7
c. 【説明Ⅱ】は、色の配置について左から説明されていることが示されている。	イ	83.3
d. 【説明Ⅰ】は色から、【説明Ⅱ】は形から説明されている。	ウ	25.0
e. 【説明Ⅱ】は描く順番に説明されている。	(ウ)	16.7

【表3】ワークシートの記述分類のうち、d・eは、a・b・cと比べて少なかった。dは【表2】の学習事項ウに対応する記述分類で、ウはワーク2の核心となる学習事項である。

授業者は、机間指導の時点でdが少ないことを把握し、クラスに向けて「ワーク1と同様に順序に目を向けて見よう」と助言した。しかしながら、dに類する記述を書く生徒はほとんど現れなかった。

この原因としては、エラーモデルである【説明Ⅰ】の文字数が【説明Ⅱ】と比べて少ないことが考えられる。【説明Ⅰ】から【説明Ⅱ】を読んだ時に、情報が追加されていると認識し、説明の順序に注意が向かなかつたと推察される。順序について着眼させるためには、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の文字数、文の数、言及される説明の項目数を近づける必要がある。

(3) ワーク3 「説明にチャレンジ」

ワーク3は、ワーク1およびワーク2で身に付けた学習事項を用いて、説明を書く活動を設定した。以下に示す題材から1つを選んで説明文を書かせた。説明文を書く前に【表4】に示すルーブリックをスライドで提示し、どのようなことに注意して書くのかについて説明した。

A 私の得意な〇〇のコツ

あなたの得意なことや知っていることのコツや方法（たとえば、黒板のきれいな消し方、図書館での本の借り方、電車やバスの乗り方など）について、他の人もわかるように、手順を説明しなさい。

B お部屋の中は

ある特定の部屋の中（たとえば、自室や部活動の部屋、教室や特別教室など）について、他の人もわかるように家具などの配置を説明しなさい

【表4】 ワーク3 ルーブリック

評価項目		説明のプロ	おおむねよい	がんばろう
表現	あいまいな表現がないか。	<input type="checkbox"/> あいまいな表現がない。	<input type="checkbox"/> あいまいな表現が1箇所ある。	<input type="checkbox"/> あいまいな表現が2箇所以上ある。
(Aの場合)展開	時間の順序に従って説明されているか。	<input type="checkbox"/> 時間の順序(古→新)に従って説明されている。	<input type="checkbox"/> 順序を改めるべき箇所が1箇所ある。	<input type="checkbox"/> 順序を改めるべき箇所が2箇所以上ある。
(Bの場合)展開	全体から部分の順に説明されているか。	<input type="checkbox"/> 全体から部分の順に説明されている。	<input type="checkbox"/> 順序を改めるべき箇所が1箇所ある。	<input type="checkbox"/> 順序を直す箇所が2箇所以上ある。

コメント(任意)

生徒は、題材を選んで説明文を書いた。題材を選択した生徒の割合は、Aが58.3%で、Bが41.7%だった。その後、ペアで互いの説明文を読み、ルーブリックを用いて評価させた。「説明のプロ」の評価を受けた者は、「表現」の項目で87.5%、「展開の項目」で95.9%だった。ワーク3で生徒が書いた説明文を【表5】に示す。

【表5】 ワーク3 題材Aの生徒作品

US Jの 익스프레스パスの購入方法

US Jには「 익스프레스パス」というものがあります。それはアトラクションの待ち時間を大幅に短縮できるものです。お金はかかりますが、アトラクションを楽しみやすくするでしょう。パスの購入方法は、まず、US Jの公式サイトにアクセスします。次に、 익스프레스パスの購入画面に進みます。そこでいつUS Jに行くのか、何人分購入するのか、どのアトラクションを利用するのか、利用する時刻はいつなのかを入力・選択します。最後に、最終確認をしたら購入完了です。配付されたQRコードは当日忘れずに持っていきましょう。

【表5】の生徒作品は、時系列に沿って手順が説明されるとともに、「まず」「次に」「最後に」と接続語が効果的に用いられている。本時のねらいを十分に達していると評価できる。

この作品を書いた生徒を授業の終末で発表させたところ、教室内からの拍手を得ていた。翌々月には修学旅行でユニバーサルスタジオジャパンに訪問することになっていた。時節にあった内容で書いたことも、教室の生徒の心をつかんだのかもしれない。しかし、手順の説明としては模範的な文章であり、この生徒の得た拍手のうちに、心穏やかにして研究授業の終了を告げるチャイムを耳にすることができた。

2. 考察

今回の研究授業を通じて、エラーモデルを取り入れる上で注意すべき2つの点について気付くことができた。

第一に、エラーモデルは、授業者の意図していない「誤り」が含まれていることがある。1. (1)で述べた通り、今回の授業では見られなかったが、他のクラスでは、意図しない「誤り」の指摘を生徒から受けた。このような生徒の指摘に対して、理由や考えを述べさせ、一緒に考えることで言葉の働きに向き合うことができる。しかしながら、意図した学びを導くエラーモデルの作成は容易ではないということを実感した。

第二に、比較のためにエラーモデルを作成する場合、誤謬以外の特徴を比較対象と近似させる必要がある。ワーク2では、文字数、文の数、言及される説明の項目数が比較対象と異なっていた。そのため、生徒の注意は追加された情報に向かい、意図していた、説明の順序への気付きを得られなかった。なお、このエラーモデルは、言語技術教育の大家である三森(2013)が空間配列の説明で示した例をもとに作成した。三森が示した例も、文字数、文の数、言及される説明の項目数がエラーモデルと比較対象とは異なりがある。

エラーモデルは、生徒の発見を導く有効な手法だが、作成には、細心の注意が必要である。作り込まれていないエラーモデルは、生徒の学びを空疎にする可能性さえある。したがって、「教材研究を十分に行う」という教師にとって当たり前のことを再確認することになるのだが、私は、中堅教諭等資質向上研修を受講し、教職生活の節目を迎えている。そんな今、初心に立ち返る気付きを得ることでき、励みになったと感じている。

参考文献

三森 ゆりか (2013). 大学生・社会人のための言語技術トレーニング, 大修館書店, pp.73-80

授業研究会の記録

日 時 : 令和7年10月16日(木)
14:35 ~ 15:35
会 場 : 共通2-3教室
指導・助言 : 指導主事 物部 長幸 先生
司会・進行 : 教諭 石山 伸介 先生
記 録 : 教諭 大石 史子 先生
参 加 者 : 10名

I 授業者からの感想

(最初に)

- 説明の順序に関する「書くこと」の授業を実施した。生徒にはこれから「書くこと」の学習を活かす機会がある。たとえば、総合的な探究の時間などでレポートを作成すること、大学入試や就職試験などで小論文や作文を書くことなどが考えられる。しかしながら、生徒が書いた文章や話した内容に目を向けると、「時系列で整理されていない自身の行動についての報告」や「部分から全体への順序で展開される場所や経路についての説明」など、課題のあるものがあつた。そこで、説明の順序に関する「書くこと」の学習が必要だと考え、本単元を構想した。
(各班からの意見を踏まえて)
- 生徒は、説明の順序性に気を付けながら文章を書いていると、接続語を用いる必然性やその効果に気付くはずである。接続語は、特に論理的な文章を題材とした「読むこと」の学習で重要である。「書くこと」の学習で気づいた接続語の役割を、「読むこと」学習で文章の構成や展開を読み取る上で役立てることができる。「読むこと」と「書くこと」の学習のつながりを生徒に気付かせたい。これが学習指導要領に示される「言葉による見方・考え方」を働かせる機会になると考えている。以上のことを協議の中で気付くことができた。
- 「前―後」「先―後」は誤解を招きやすい言葉なので、授業の説明に用いる際には配慮したい。
- 相互評価をさせたねらいは、生徒が書いたものを他者に読んでもらうことを実感させることにある。観点別評価の導入以降、生徒はレポートや小論文、作文など文章を書く機会が増えたと思われる。しかしながら、書いたものに、本当の意味での「評価」をもらった経験は多くないのではないかと。ここでいう「評価」とは、提出を示す検印やA～Cなどの到達段階が示された記号ではない。読者の反応を目の当たりにすることである。書いた文章をその場で読者に読んでもらい、コメントをもらう。ただし、学習活動の中でなされているものだから、コメントも学習目標を踏まえてなされるべきである。そこで、目の付け所を示すものとしてルーブリックを用いることにした。ルーブリックには限界があるのも事実で、ねらいや場面に応じて効果的に用いたい。
- 授業の終末にワーク3で書いた説明を生徒に発表させた。発表後、教室から拍手が沸いた。「書くことは楽しい」と思ってもらえたら、授業者としては嬉しい。

II 参加者からの意見

(成果)

- テレビ番組を用いた導入は、限られた時間で生徒の興味を惹いていた。

- ワークシートが工夫され、指示も明確だったので、生徒は今何をすればいいのか、ワークシートのどこに取り組めばいいのかを理解して学習していた。
- 学習目標に即した学習活動を設定し、生徒は見通しをもって活動していた。
- 学習で身に付いたことを、生活でどのように役立てることができるかを「部活動の後輩に助言する」「面接で説明する」など具体的に示していた。生徒の学習意欲の喚起につながっていたと考えられる。
- 学習活動も生徒の関心を惹きつけるものだった。話し合いの形態もペアを指定するなど工夫されていた。
- おもちゃのマイクを使って生徒に発言を求めると、発表しやすい雰囲気を作る工夫がなされていた。
- 授業の冒頭と終末で、学習目標を確認していた。

(課題)

- 相互評価を充実させるために、ペアやグループの組み合わせに配慮が必要である。具体的には、ワーク3で生徒が選んだ題材ごとにペアやグループを組ませたい。
- 相互評価を通じて課題が明らかになるが、その課題をどう解決していくかについて、学習の機会を設定したい。
- ワーク3の題材Bであれば、ループリックを用いるよりも、ペアでお互いの説明を読み、図や絵を描いて伝わったかどうかを確認の方が効果的ではないか。ループリックの活用は生徒にとって難しい場合もある。
- ワーク1の「カップ焼きそばの作り方」で、授業者は「時間の順序に従って、『古いもの』から『新しいもの』の順に説明する」と説明していた。「古い」「新しい」が言葉として違和感があった。
- 次回の学習へのつながりが、授業の中盤で示されたが、終末に示すほうが適切かもしれない。

Ⅲ 指導主事からの指導・助言

授業者は、書籍や文献を読み込み、オリジナルの教材を作成してこの研究授業を行った。授業や研究への熱意が伝わってくる。研究協議がいい雰囲気で行われていたことに感謝する。

1. 国語科には「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3つの領域がある。高等学校国語科全体の課題として、「読むこと」の学習に偏っており、「書くこと」の学習が十分になされていないことが挙げられる。今回の研究授業は「書くこと」の学習を取り上げたもので、国語科教育の課題にチャレンジする意欲が認められる。
2. 学習目標が明確で学習活動も精選されていた。授業者のねらいがよく伝わってきた。生徒は「時系列の順序」と「全体から部分への配置」の2つに絞って学習を進めていた。今日、自分で書いたものを振り返り、その後も手順と配置という視点で考えてみたのではないかと。広がりや余韻のある授業だった。
3. 授業の導入から終末にかけて、学習が深まっていると生徒も感じていたと思われる。学習活動を通じて、生徒の意欲が増しているのが伝わってきた。
4. 生徒の手がよく動いていた。今の高校生はなかなか書かない。高校生ならではの発想を引き出している場面もあり、生徒が活躍する姿を目にすることができた。
5. 相互評価は難しいが、ループリックの活用は非常によい試みだった。「評価」については協議の中でも議論になったが、「最終的な学習の到達度として記録に残す評価」(総括的評価)なのか、「途中経過を見取って学習の励みにする評価」(形成的評価)なのか、前提を確認したい。今回は、相互評価を通じて、自らの文章を推敲するきっかけになっている。ループリックによる相互評価を取り入れたことはよい試みだったと言える。

最後に、今日のような授業が年間を通して設定されていけば、1年後の生徒は大きく成長するのではないかと。生徒の素質を上手に引き出せていた授業だった。

地理歴史科（世界史探究）学習指導案

日 時 : 令和7年10月16日(木) 5校時

場 所 : 2年A組教室

対 象 : 2年A組 選択生徒14名

指 導 者 : 教諭 關 友明

教 科 書 : 『詳説世界史 世界史探究』 山川出版社

1 単元(題材)名

第I部 諸地域の歴史的特質の形成 第5章 イスラーム教の成立とヨーロッパ世界の形成

(1) アラブの大征服とイスラーム政権の成立

2 単元(題材)の目標

- (1) イスラーム教がどのように成立し拡大していったのか、また、ウマイヤ朝・アッバース朝がどのように成立し発展したかを理解することができる。(知識及び技能)
- (2) イスラーム政権の成立や政策の違いの背景について、多角的な視点から考察し、自分の考えを根拠をもって表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- (3) 多様な文化や価値観が共存するイスラーム史から、歴史を自らの生き方や現代社会の理解に結び付けるとともに、協働的な活動を通して他者の意見を尊重しながら学びを深めようとしている。(学びに向かう力、人間性等)

3 生徒と単元(題材)

(1) 単元(題材)観

本単元では、イスラームの成立と拡大、ウマイヤ朝からアッバース朝への変遷を通して統治方法の変化について考察する。多文化共生的な統治から、現代における多様性の尊重や社会の在り方についても考える機会とする。

(2) 生徒観

2年A組(文系・選択14名)は、授業のねらいを踏まえて主体的に学習に取り組む生徒が多い一方で、7月の授業アンケートでは、学習内容と自身の進路や生き方との関連を十分に意識できていない生徒もいる。歴史学習を単なる知識理解ではなく、事象の背景について考えるとともに、現代の社会や自分自身とも関連付けさせたい。

(3) 指導観

ウマイヤ朝とアッバース朝の統治方針が変化した背景について史料から考えさせ、論述で表現させる。その際、明確な根拠をもって自分の考えを主張できるよう活動を工夫する。また、他者との意見交換を通して協働的に学ぶことで、多角的な視点をもって思考を深められるようにする。

4 本校の重点課題との関わり

重点課題 「考える力」を養い、課題解決力の育成につなげる授業改善

- ・史料をもとに論述させ、知識を活用しながら自分の考えを表現させる。その際、生徒同士で意見交換を行い、互いの記述内容を相互評価することで、根拠をもって考えを表現することを強く意識させる。
- ・ICTを活用して生徒一人一人の考えを可視化・共有することで、意見交換を促進し、思考を深めさせる。

5 単元(題材)の指導計画

第I部 諸地域の歴史的特質の形成 第5章 イスラーム教の成立とヨーロッパ世界の形成(総時数7時間)

(1) アラブの大征服とイスラーム政権の成立 …3時間(本時3/3)

(2) ヨーロッパ世界の形成 …4時間

6 単元(題材)の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	イスラームの成立や拡大、政権の成立や発展について、史料を活用して正しく理解し説明している。	イスラーム政権の成立や変容について多角的に考察し、自分の考えを根拠をもって論理的に表現している。	多様な文化・価値観をもつイスラーム史を、現代社会や生き方と結び付けるとともに、他の意見を尊重しながら学びを深めようとしている。

7 本時の計画（本時 3／3時間）

(1) 本時の目標

- ・アッパース朝の税制改革の理由について、史料をもとに自分の意見を組み立て、根拠をもって論述できている。(イ)

(2) 展開

段階	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・アッパース朝の税制改革の内容を問う入試問題に解答する。 	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の解答を確認する。 ・前政権のウマイヤ朝との違いを確認する。 		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> 論述問題「アッパース朝における税制上の政策について説明せよ。」（新潟大-人文 2025） </div>					
展開 25分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> 学習課題「ウマイヤ朝からアッパース朝になって、税制度が変化したのはなぜだろうか？」 </div>				
	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の課題を確認 ・史料をもとに考えをまとめ、記述する。 ・グループで話し合い、互いの解答を評価し合う。 	個人 グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・史料を提示する。（史料：ムハンマドの最後の説法） ・評価規準（適切な根拠をもとに論じているか）を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・史料と既習知識を関連付けて記述している。(イ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・記述内容
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> 解答を他の生徒のものと比較し、互いに評価し合う。 </div>					
	<ul style="list-style-type: none"> ・他の生徒の解答を参考にして、自分の解答を見直し、ブラッシュアップする。 	全体	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTツールを用いて全員の解答をクラス全体に共有する。 ・生徒の解答を確認し、よい解答をピックアップして示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の意見をもとに考えを深め、表現している。(イ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・相互評価
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> ICTツールを用いて、生徒一人一人の解答をクラス全体で共有し、思考を深める。 </div>					
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・改めて課題について考えをまとめ、解答を記述する。 ・授業の振り返りを行う。 	個人 個人	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠を明確にして論述することを確認する。 ・何名かの解答を紹介する。 ・アッパース朝の多文化共生的統治が民衆に受け入れられ、繁栄につながったことを指摘する。 ・イスラーム世界がもつ多様性への対応について、現代の統治の在り方との関連を指摘する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠をもって自分の考えを適切に表現している。(イ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・記述内容

世探 授業プリント【5-1-2】 第5章 1 アラブの大征服とイスラーム政権の成立(2) p.88-90

2年 組 番 氏名 _____

■ 大学入試 (個別試験) では、こう出る!

A 661年、第4代正統カリフの **ア** と対立していたシリア総督 **イ** がウマイヤ朝を開いた。ウマイヤ朝では支配層であるアラブ人のイスラーム教徒(ムスリム)が軍事力を独占し、税制上でも特権を持っていたため、イラン人など異民族出身の改宗者は不満を募らせるようになった。こうした社会の対立に乗じてムハンマドの叔父の子孫であるアッバース家^(a)が反乱を起こし、ウマイヤ朝は滅亡した。

問 2 下線部(a)に関連して、アッバース朝における税制上の政策について説明せよ。

新潟大学 - 人文 (前期) 2025 年度

FigJam の画面（学習課題に対する生徒の記述。付箋に書いて貼る形式で実施。）

・ 1 回目の記述（グループごと）

グループ1

今日の問い ウマイヤ朝からアッバース朝になって、税制度が変化したのはなぜだろうか？
(以下の史料をもとに、自分の考えを付箋に書いて貼ろう)

史料1 ムハンマドの言葉
「すべての人類はアダムとイブの末裔です。アラブ人が非アラブ人に、非アラブ人がアラブ人に優るなどということはなく、白い者が黒い者に、また黒い者が白い者に優る、などということもありません。」
——「預言者ムハンマドの最後の説教」

史料2 ウマイヤ朝時代の人々の様子
「ホラーサーン（イラン東部）の地では、イスラームに改宗したペルシア人たちが、なおもジズヤを課せられ、アラブ人と同等に扱われないことに不満を叫んでいた。彼らは、信仰においては同胞であるのに、課税においては異教徒と変わらぬ扱いを受けていた。」
—— タバリー『預言者と諸王の歴史』

ウマイヤ朝の時の税制度だと非アラブ人からの反乱が起きるかもしれないから。ムハンマドの最後の教えにもすべての者が平等と言われているから。

ムハンマドの教えによって、アラブ人や他の民族の人々に平等の意識がめばえたから。

ムハンマドの言葉やアラブ人と同等に扱われていない人たちの不満の声によって税制度が変化した。

グループ2

今日の問い ウマイヤ朝からアッバース朝になって、税制度が変化したのはなぜだろうか？
(以下の史料をもとに、自分の考えを付箋に書いて貼ろう)

史料1 ムハンマドの言葉
「すべての人類はアダムとイブの末裔です。アラブ人が非アラブ人に、非アラブ人がアラブ人に優るなどということはなく、白い者が黒い者に、また黒い者が白い者に優る、などということもありません。」
——「預言者ムハンマドの最後の説教」

史料2 ウマイヤ朝時代の人々の様子
「ホラーサーン（イラン東部）の地では、イスラームに改宗したペルシア人たちが、なおもジズヤを課せられ、アラブ人と同等に扱われないことに不満を叫んでいた。彼らは、信仰においては同胞であるのに、課税においては異教徒と変わらぬ扱いを受けていた。」
—— タバリー『預言者と諸王の歴史』

イスラーム教徒と改宗したイスラーム教徒を同等とする考え方に変わったから。

マワーリーの税が免除されないことが不満だったから。

ムハンマドの教えで非アラブ人とアラブ人は平等であるとあったから。

今日の問い

ウマイヤ朝からアッパース朝になって、税制度が変化したのはなぜだろうか？

(以下の史料をもとに、自分の考えを付箋に書いて貼ろう)

史料1 ムハンマドの言葉

「すべての人類はアダムとイブの末裔です。アラブ人が非アラブ人に、非アラブ人がアラブ人に優るなどということはなく、白い者が黒い者に、また黒い者が白い者に優る、などということもありません。」

——「預言者ムハンマドの最後の説教」

史料2 ウマイヤ朝時代の人々の様子

「ホラーサーン（イラン東部）の地では、イスラームに改宗したペルシア人たちが、なおもジズヤを課せられ、アラブ人と同等に扱われないことに不満を叫んでいた。彼らは、信仰においては同胞であるのに、課税においては異教徒と変わらぬ扱いを受けていた。」

——タバリー『預言者と諸王の歴史』

課税において平等に扱われないことに不満を抱く信仰者が多くいたから。

ムハンマドの言葉で人種による違いはないとび平等について語られており、同じ宗教を信仰する人々の中で差別をするのは教えに習っていないから。

預言者であるムハンマドがイスラーム教信者は全員平等であると唱えたから。

アラブ人がイスラーム教徒間の課税法の平等性に対し不満をおぼえたから。

・リライト（他の意見を基にブラッシュアップして再記述） ※生徒の付箋を教員が整理したもの

リライト（史料や他の考えを参考に、改めて解答してみよう）

ムハンマドの言葉によってアラブ人と非アラブ人が平等の意識をするようになったから。

今日の問い ウマイヤ朝からアッパース朝になって、税制度が変化したのはなぜだろうか？
(以下の史料をもとに、自分の考えを付箋に書いて貼ろう)

史料1 ムハンマドの言葉

「すべての人類はアダムとイブの末裔です。アラブ人が非アラブ人に、非アラブ人がアラブ人に優るなどということはなく、白い者が黒い者に、また黒い者が白い者に優る、などということもありません。」

——「預言者ムハンマドの最後の説教」

史料2 ウマイヤ朝時代の人々の様子

「ホラーサーン（イラン東部）の地では、イスラームに改宗したペルシア人たちが、なおもジズヤを課せられ、アラブ人と同等に扱われないことに不満を叫んでいた。彼らは、信仰においては同胞であるのに、課税においては異教徒と変わらぬ扱いを受けていた。」

——タバリー『預言者と諸王の歴史』

平等に扱われない人々の不満が多く、ムハンマドの教えで平等について語られているため、教えを守るようになったから。

ムハンマドが信者の平等を唱えたにも関わらず、ペルシア人がアラブ人と同等の扱いを受けていないことに不満を覚えたから。

ムハンマドがイスラーム教徒の平等を唱え、その考えが課税されていた人々とされていない人たちに受け入れられたから。

ムハンマドはみんな平等と説いていたのに、マワーリーに対して不平等だったから。

課税について不満をもっている中でムハンマドが平等を唱え、平等の考えを意識するようになったから。

ホーラサーンの地で叫ばれていた不満をそのままにしておくとムハンマドの教えにも反して、反乱もおこるかもしれなかったから。

ムハンマドの平等に関する教えが不満を持っていた人たちの反乱を防ぐことにつながったから。

改宗しても税の負担があったことやムハンマドの教えに人種間の差別はなく、平等であると唱えられていたことが変化につながった。

ムハンマドの教徒間の平等を説くような言葉や教徒間の課税制度に不満を覚えた人々の訴えがきっかけとなったから。

授業研究会の記録

日 時 令和7年10月16日(木) 放課後
場 所 共通2-1教室
指導・助言 教育専門監 佐藤 央 先生(秋田西高校)
司会・進行 教諭 畠山 幸大(本校 地歴公民科)
参加者 11名

I 授業者からの感想

史料をもとに自分の考えを表現させることに焦点を当てた授業を計画した。FigJam(フィグジャム)というオンラインツールを活用して、タブレット端末に入力した自分の考えやほかのクラスメイトの考えをすぐに共有できるようにした。生徒は史料を活用して自身の意見をよく書いてくれていたと思うが、思いのほか生徒の表現した内容が似たり寄ったりになっていたのも、資料の提示の仕方を誘導しすぎたのではと感じている。

II 参加者からの意見

(成果)

- ・非常に落ち着いた雰囲気、授業が進んでいた。先生の余裕やゆとりが生み出していたと感じた。
- ・生徒の意見交流がICTを活用してすぐに共有できるため、とてもスムーズに進行が進んでいた。
- ・現代社会との関連性の中で最後に、「多文化共生社会」という観点が良かった。
- ・授業目標に則した「生徒が史料から読み取る」、「自身の知識を活用しながら考えを表現する」が体现できていたように感じる。

(課題)

- ・「多文化共生社会」についてもっと言及しても良いのでは? → 例) 参院選や身近に住む外国人など
- ・「多文化共生社会」について、実際にはこれが原因でアッパー朝はだめになっていっている側面もある。また、いきなり現代社会との関連性の話をするよりもイスラーム教には「スンナ派」や「シーア派」などの題材もあるため、現代社会につなげるよりも、イスラーム社会を題材にして取り上げて良かったのではないかな?
- ・多様な意見が出なかったのはICTのデメリットも関連しているのでは?
 - 人の意見を簡単に見ることができる、資料の提示の仕方も工夫の余地があるのではないかな?
- ・ほかの生徒の意見を踏まえ、ブラッシュアップする時間をもう少し明確化しても良かった。

III 教育専門監からの指導・助言

- (1) 地理歴史は内容が非常に多く、授業進度で苦勞することも多い。基本的に1時間で見開き1ページ以上。
 - ただ今回のような目的があるのであれば、今回の授業のやり方は良いと感じた。
- (2) ICTを活用していたが、生徒が改めて、振り返ったり書いたりする時間も大切なのではないかな?
 - ICTは意見を共有しやすい利点もあるが、他者の意見に傾倒する場合も。記録できる形が望ましい。
- (3) 生徒が何をすべきかが明確で、進行もスムーズであった。
 - もう少し、リライトの時間をとれると、より生徒の意見が深まったのではないかな。

地理歴史科の視察

成果

①
1/16 視察

①
1/16 視察

②
1/16 視察

③
1/16 視察

課題

④
1/16 視察

⑤
1/16 視察

⑥
1/16 視察

理科（物理基礎）学習指導案

日 時 : 令和7年10月16日(木) 5校時
 場 所 : 物理実験室
 対 象 : 2年DEF組 発展クラス 33名
 指 導 者 : 教諭 飛澤 一斗
 教 科 書 : 『高等学校物理基礎』第一学習社

1 単元(題材)名

第2節 音波 ①音波の性質 探究7 気柱の共鳴

2 単元(題材)の目標

- (1) 音波の性質を身近な現象と関連させて理解し、それらの観察・実験に関する技能を身につけることができる。
(知識及び技能)
- (2) 気柱に生じる振動の特徴を探究し、波の波長、振動数との関係性を見出して表現することができる。
(思考力、判断力、表現力等)
- (3) 楽器から出る音のしくみの分析に主体的に関わり、科学的に探究しようとしている。
(学びに向かう力、人間性等)

3 生徒と単元(題材)

(1) 単元(題材)観

ここでは、波についての観察、実験などを通して、波の性質、音と振動について理解させ、それらの観察、実験などの技能を身に付けさせるとともに、思考力、判断力、表現力等を育成することが主なねらいである。その際、音に限らず身の回りには多くの波動現象が存在することに気付かせる。

(2) 生徒観

本校は全日制普通科の進学校である。各種模試・実力テストの全国偏差値は50程度であり、過年度と比較しても大きな差はない。対象生徒は物理を履修する生徒のうち、物理基礎の考査および実力テストにおいて、上位半数を抽出した生徒である。公式や用語を覚えることは得意だが、その意味について科学的思考をもってとらえず、活用できない生徒もいることが課題である。

(3) 指導観

授業進行の効率化を図り、ICT機器等を活用して学習内容の説明を行っている。観察、実験については、班ごとに振動数の異なる音源を用意し、結果の比較から振動数と波長の関係を見だし、既習事項と関連付けて学習内容を定着させる。

4 本校の重点課題との関わり 重点課題 「考える力」を養い、課題解決力の育成につなげる授業改善

本単元で扱う音波は生徒にとって身近な題材であり、学んだ内容と実生活との関連付けを行うことで、生徒が科学的思考力を働かせられる授業展開にする。主体的・対話的な学びの機会として班活動での実験を設定することで、生徒全体の科学的な思考力を向上させていく。

5 単元(題材)の指導計画 第2節 音波の性質(総時数6時間)

- (1) 音波の性質 … 2時間
- (2) 物体の振動 … 2時間
- (3) 探究7 気柱の共鳴 … 2時間(本時1/2)

6 単元(題材)の評価規準

	(ア) 知識・技能	(イ) 思考・判断・表現	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度
評価の観点	① 音波の性質を身近な現象と関連させて理解し、それらの観察・実験に関する技能を身につけている。	① 気柱に生じる振動の特徴を探究し、波の波長、振動数との関係性を見出して表現している。	① 楽器から出る音のしくみの分析に主体的に関わり、科学的に探究しようとしている。

7 本時の計画 (本時 5/6時間)

(1) 本時の目標

気柱に生じる振動の特徴について実験を行い、振動数を測定する方法を見いだすことができる。

(思考・判断・表現)

(2) 展開

段階	生徒の学習活動	形態	教師の活動及び指導上の留意点	主な評価の観点	評価方法
導入 10分	・既習事項の確認として、共通テストの過去問の解答を考え、班で正答を議論する。	一斉 グループ	・集計結果を表示し、既習事項の理解度を可視化する。 ・3～4人のグループを組ませ、言語活動を通して再考させる。 ・理解度に合わせて簡単な解説を行い、以後の検証実験と結び付ける。		発言 ワークシート
発問「なぜその答えに至ったか、班(全体)で共有してみよう」					
展開 35分	・実験方法を確認する。 ・実験を通して得られた結果をもとに、音源の振動数を計算する。	グループ	・「音源の振動数の測定実験」を行わせる。 ・共鳴音が聞こえたときの水面の位置を記録させ、その結果を踏まえてそれぞれの固有振動の状態を推測させる。その際、気柱の開口端の位置には定在波の腹が、閉口端の位置には定在波の節ができていることを強調する。 ・基本振動と3倍振動の様子を比較し、波長を求めるための方法を考察させる。 ・実験終了後に、音源の振動数を測定する方法を見出す。 ・開口端補正の求め方についての概念に触れ、実際に求めさせる。	気柱に生じる振動の特徴について実験を行い、振動数を測定する方法を見いだすことができる。 (イ)思考・判断・表現	実験・観察
まとめ 5分	・本時を振り返る。	一斉	・結果は後日、ワークシートで回収することを伝える。		
発問「この実験において、気温が高くなると、共鳴点の位置はどのように変わるか。」					

探究7 気柱の共鳴

(教科書 p. 185)

年 組 番 名前

■目的

気柱の共鳴を利用して、おんさの振動数を調べよう。

■準備

気柱共鳴装置、おんさ(500~700Hz)、たたき棒(ゴム製)、温度計

■方法

- ①目盛りつきガラス管Aを鉛直方向に保つ(図[a])。
- ②容器BをAの管口よりも少し高い位置に保持する。その状態でAの管口付近まで水を入れる。
- ③気温 t [°C] を測定する。
- ④おんさをたたき棒で軽くたたいて鳴らし、ガラス管Aの管口近くにもっていく。
(注意) ガラス管が破損するおそれがあるため、おんさをたたくとき、管口付近でたたかないようにする。また、たたいたおんさをガラス管に接触させないようにする。
- ⑤おんさを鳴らしたまま、容器Bを下げてガラス管内の水面Cを下げ、最初の共鳴点(第1共鳴点)を見つける。共鳴する音が聞こえたら、その付近でゆっくりと水面Cを上下させ、最も音が強くなる位置を求めて、管口から水面までの距離 L_1 [m] を測定する。
- ⑥さらに水面を下げて、第2の共鳴点(第2共鳴点)を見つけ、管口から水面までの距離 L_2 [m] を測定する(図[b])。
- ⑦④~⑥を3回繰り返す。

■データの処理

- ①はじめと終わりの気温から、実験中の平均気温 t [°C] を計算する。
- ②平均気温 t [°C] から、「 $V=331.5+0.6t$ 」の式を用いて、音速 V [m/s] を計算する。
- ③測定した L_1 [m] と L_2 [m] を表でまとめ、それぞれの平均を求める。
- ④音波の波長 λ [m] を求める。
- ⑤おんさの振動数 f [Hz] を求める。

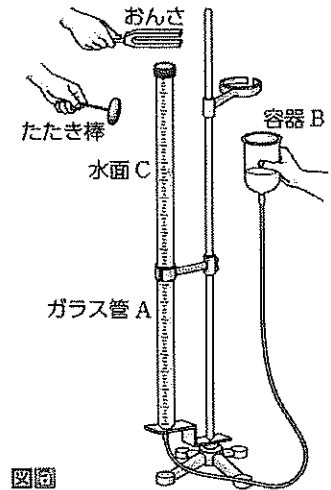


図1

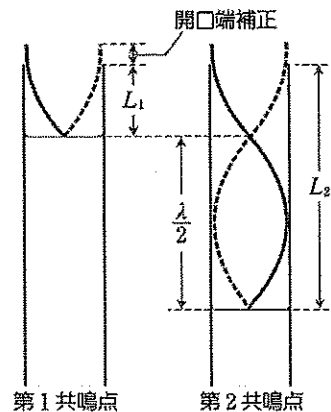


図2

・気温と音速

気温 t [°C]	音速 $v=331.5+0.6t$ [m/s]

・第1共鳴点と第2共鳴点までの距離（最小目盛りの1/10まで測定値を取る）

測定回数	第1共鳴点までの距離 L_1 [m]	第2共鳴点までの距離 L_2 [m]
1		
2		
3		
平均値		

・波長 λ [m] と振動数 f [Hz]

$\lambda =$	[m]	
$f =$	[Hz]	

■考察

①音波の波長 λ [m] を $4L_1$ [m] とし、その値を求め、上記の表と比較せよ。

② L_1 [m] と $\frac{\lambda}{4}$ [m] の値がわずかに異なることから、開口端補正を求めよ。

■発展課題

この実験において、気温が高くなると、共鳴点の位置はどのように変わるか。

物理基礎

問 5 3番目の方法として、図1のような、水だめを上下させることでガラス管内の空気の部分(以下、これを気柱と呼ぶ)の長さを調節できる装置を用いて、次の手順で音の速さを測定した。

まず、ガラス管の上端の近くまで水面を上げた。次に、ガラス管の上で振動数 500 Hz のおんさを鳴らし、水面を下げていき、気柱が共鳴する水面の位置を測定した。このとき、気柱がはじめて共鳴したときの水面の位置と2回目に共鳴したときの水面の位置は 34 cm 離れていた。この結果から求められる音波の波長と、音の速さの組合せとして最も適当なものを、後の①~⑧のうちから一つ選べ。

16

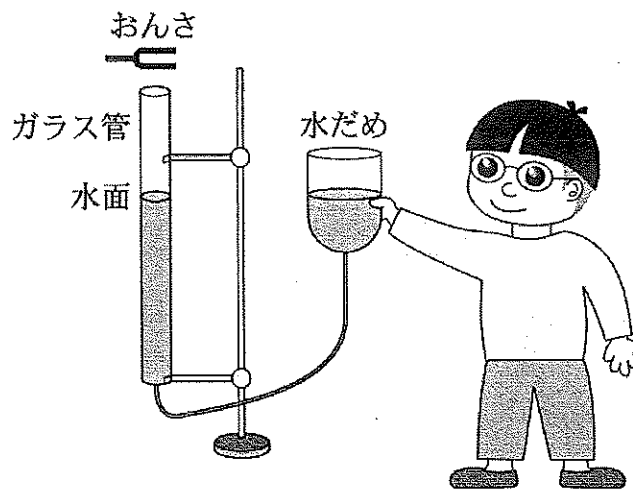


図 1

	波長[m]	音の速さ[m/s]
①	0.17	320
②	0.17	340
③	0.34	320
④	0.34	340
⑤	0.51	320
⑥	0.51	340
⑦	0.68	320
⑧	0.68	340

令和7年度 指導主事訪問研究授業・授業研究会（理科）
物理基礎 研究授業「気柱の共鳴」記録

日 時 令和7年10月16日（木）放課後
場 所 物理実験室
指導・助言 高校教育課 後藤 直地 指導主事（理科）
司会・進行 教諭 中村 真紀子（本校 理科主任）
参加者 14名

1. 研究授業の概要

本授業は、第2学年発展クラスを対象に「気柱の共鳴」を題材として実施された。単元の目標は、気柱の振動の特徴について、実験を通して探究し、波長や振動数、音速の関係を科学的思考に基づいて理解することである。特に、共通テストの過去問を用いた導入や、ICT機器を活用したデータの可視化、班活動による対話的な学びを通じて、本校の重点課題である「考える力」の育成を図る点に主眼が置かれた。

2. 成果

事後研究協議におけるKJ法を用いた分析の結果、以下の4つの観点で大きな成果が確認された。

① ICT活用の有効性

- データの可視化：円グラフやデジタル集計を活用し、クラス全体の考えや実験結果を瞬時に共有したことで、生徒の理解度や傾向が視覚的に捉えやすくなった。
- 時間管理の徹底：タイマーを画面表示し、活動の切り替えにメリハリをつけたことで、限られた時間内での効率的な授業進行が実現した。
- 板書と資料の併用：黒板の使い方が整理されており、文字の見やすさや図解の適切さが、ICT資料と相まって生徒の理解を助けた。

② 導入・動機付けの工夫

- 既習事項と入試問題の接続：共通テストの過去問を導入に用いることで、本時の学習内容が実践的な課題と直結していることを示し、生徒の学習意欲を高めることに成功した。
- 言語活動の充実：「なぜその答えに至ったか」を班内で議論させる過程で、科学的根拠に基づいた説明（言語化）が活発に行われていた。

③ 実験・指導体制の適切さ

- デモンストレーションの効果：教員による実演（演示）が分かりやすく、共鳴音をはっきりと聞こえるなど、実験のポイントが明確に伝わっていた。
- 到達点の提示：本時の目標が明確に示されており、生徒は何を目的に実験を進めるべきかを理解して活動に取り組んでいた。

④ 主体的な学びの醸成

- 全員参加の仕組み：班活動において、一部の生徒だけでなく全員が参加・共有できるような配慮がなされていた。
- 発展課題への挑戦：基本的な実験にとどまらず、気温の変化による影響など発展的な考察へと繋げる仕掛けが評価された。

3. 課題と改善策

協議では、さらなる授業改善に向けた具体的な課題と提言がなされた。

① 時間配分と活動の優先順位

- 考察時間の確保：実験データの測定に時間を要し、最も重要である「考察（特に開口端補正の算出）」や「結果の発表・共有」に十分な時間を割けなかった班が見られた。まとめの段階での計算処理をいかにスムーズに行わせるかが課題である。導入部分の振り返り活動の削減で時間を確保していきたい。
- 人数の偏りへの対応：欠席等による班員構成のアンバランス（1人での活動など）に対し、事前の調整やサポート体制をより柔軟に検討する必要がある。

② 実験環境および技術的指導の精査

- 音の干渉への配慮：複数の班が同時に異なる振動数で実験を行う際、隣の班の共鳴音と混同し、自班の共鳴点を見失う場面があった。班ごとの配置に距離を置いたり、使用する振動数を班ごとに変更したりなどといった設定の工夫が求められる。
- 実験操作の習熟：おんさの叩き方や、ガラス管への接触回避など、測定精度に関わる基本的な操作指導を徹底する必要がある。資料にて強調してもよい。
- 場所の選定：廊下での活動など、音の響きが異なる環境が測定結果に与える影響についても考慮が必要である。室内外で気温が異なるので、なるべく距離を取った同室内だと統一できるが、前述の音の干渉が懸念される。

③ 概念理解の深化を促す支援

- 「波長=4L」の誤解：実験において波長を単純に第1共鳴点の4倍として計算してしまう混同が見られた。定在波の図解（腹と節の位置関係）をより強調し、なぜ第2共鳴点までの距離を用いるのかという論理的理解を深める支援が必要である。誤った事例を先に出し、これでは正確な測定ができないが、なぜか？などと問いかけを行い、健全な批判力をもって考えさせるなどといった発問の工夫もある。
- 開口端補正の導入タイミング：考察のポイントである開口端補正について、実験の最初に触れておくことで、生徒が目的意識を持って測定に臨めるようにする配慮も有効である。

4. 総括と今後の展望

今回の授業研究を通して、ICT活用による効率化と、生徒同士の対話による思考の深化には一定の手応えが得られた。今後は、実験データの収集にかかる時間を短縮し、得られた結果をどのように解釈・統合して科学的な法則性を見出すかという「考察プロセス」の充実を軸足を移していく。特に、生徒が公式の暗記に頼らず、定在波の物理的イメージを持って現象を説明できるよう、補助資料（図解）や発問の精査を継続していくことが期待される。

ICT

ICT
ICT
ICT
ICT
ICT

成果

生徒の様子

指示

実験場所

ICT
ICT
ICT
ICT

課題

ICT

成果

課題

1. 調査の目的
 2. 調査の方法
 3. 調査の結果
 4. 調査の結論

1. 調査の目的
 2. 調査の方法
 3. 調査の結果
 4. 調査の結論

1. 調査の目的
 2. 調査の方法
 3. 調査の結果
 4. 調査の結論

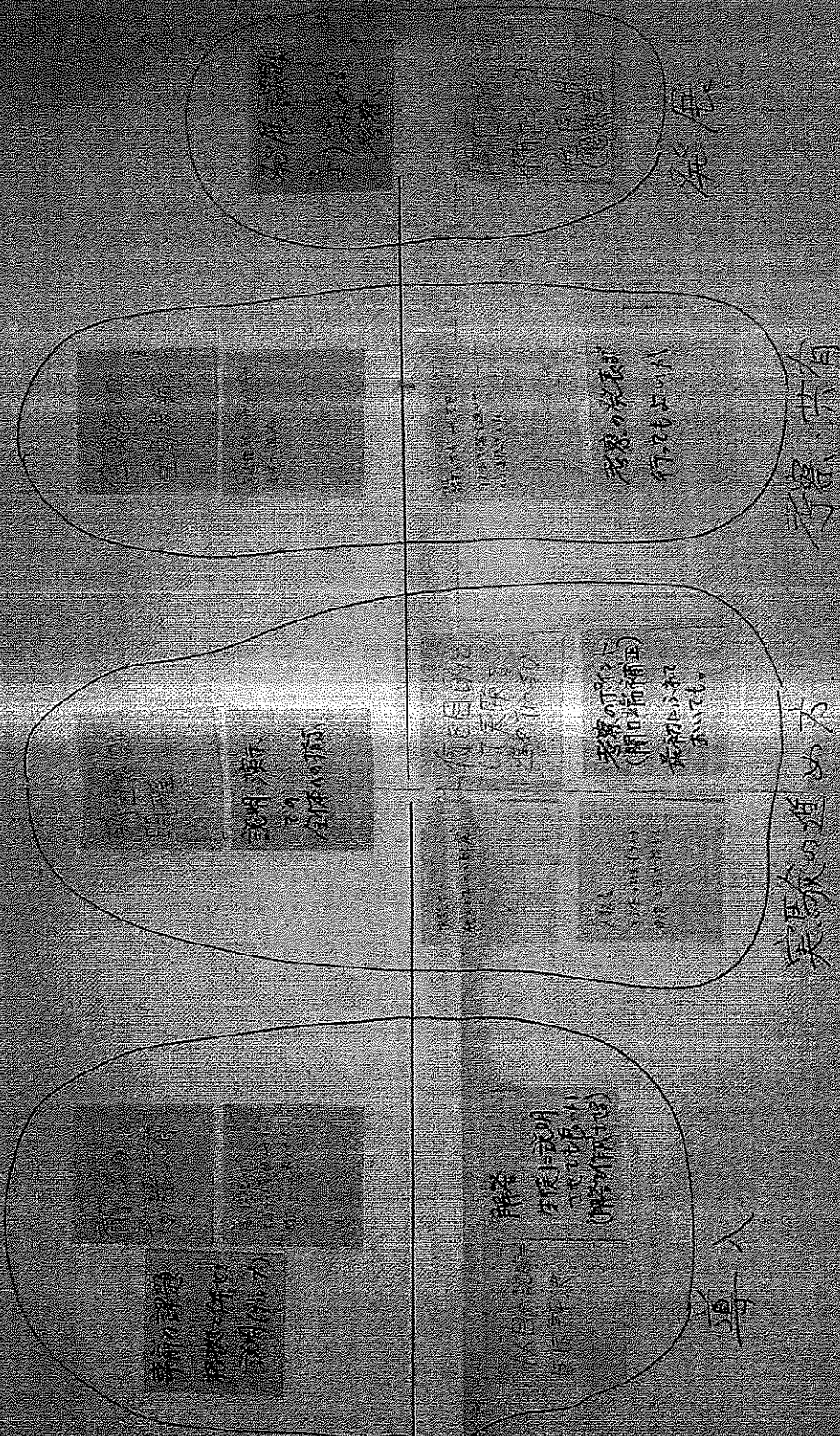
1. 調査の目的
 2. 調査の方法
 3. 調査の結果
 4. 調査の結論

1. 調査の目的
 2. 調査の方法
 3. 調査の結果
 4. 調査の結論

1. 調査の目的
 2. 調査の方法
 3. 調査の結果
 4. 調査の結論

成果

課題



知用言語

知用言語
(知用言語)

知用言語
知用言語
知用言語

知用言語
知用言語

知用言語
知用言語
知用言語

知用言語
知用言語
知用言語

知用言語
知用言語

知用言語
知用言語
知用言語

知用言語
知用言語
知用言語

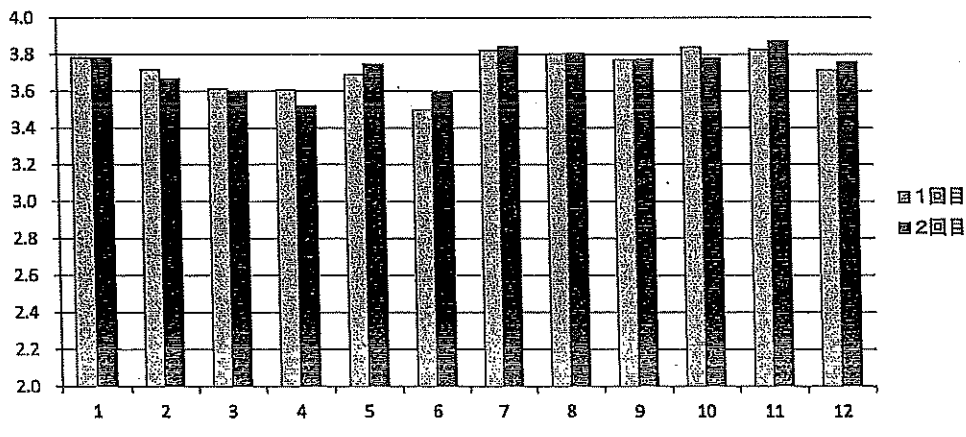
知用言語
知用言語

知用言語
知用言語
知用言語

知用言語
知用言語

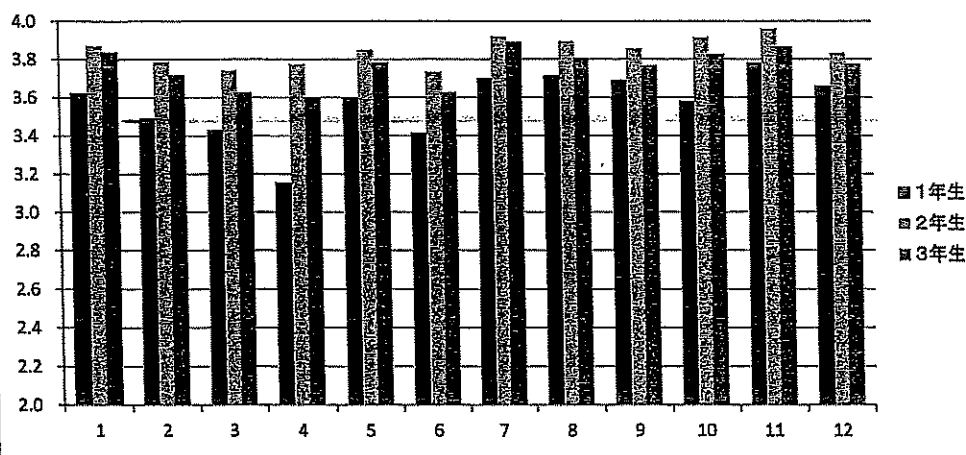
R07 第2回授業アンケート 教科全体の平均値

教科名	国語	1回目	2回目
質問項目	1 授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.8	3.8
	2 学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.7	3.7
	3 進みたい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.6	3.6
	4 予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	3.6	3.5
	5 意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.7	3.7
	6 学習と部活動の両立ができています（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.5	3.6
	7 授業のねらいがわかりやすく示されている	3.8	3.8
	8 興味や関心が持て、学力（体力、技能）の向上につながっている	3.8	3.8
	9 将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.8	3.8
	10 予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	3.8	3.8
	11 意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている	3.8	3.9
	12 授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.7	3.8



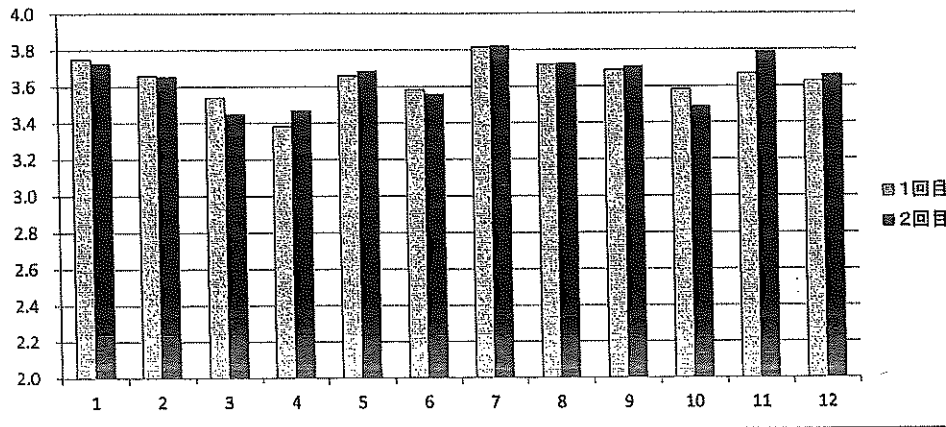
R07 第2回授業アンケート 学年別の平均値

教科名	国語	1年生	2年生	3年生
質問項目	1 授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.6	3.9	3.8
	2 学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.5	3.8	3.7
	3 進みたい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.4	3.7	3.6
	4 予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	3.2	3.8	3.6
	5 意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.6	3.8	3.8
	6 学習と部活動の両立ができています（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.4	3.7	3.6
	7 授業のねらいがわかりやすく示されている	3.7	3.9	3.9
	8 興味や関心が持て、学力（体力、技能）の向上につながっている	3.7	3.9	3.8
	9 将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.7	3.9	3.8
	10 予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	3.6	3.9	3.8
	11 意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている	3.8	4.0	3.9
	12 授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.7	3.8	3.8



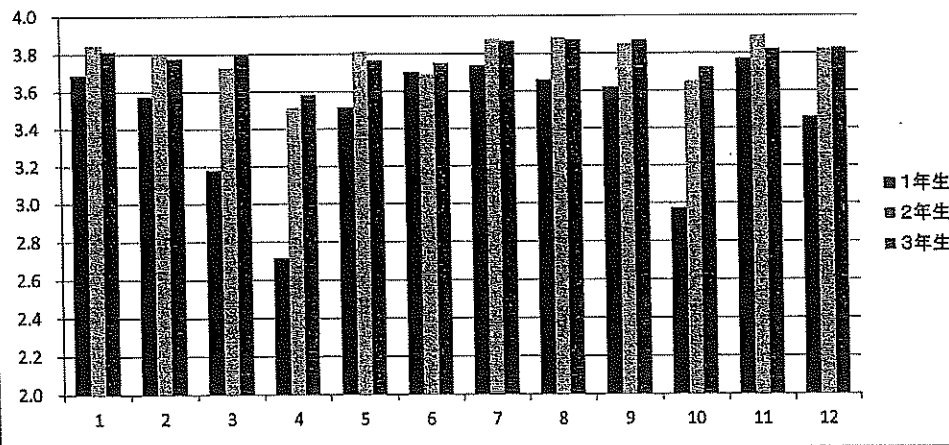
R07 第2回授業アンケート 教科全体の平均値

教科名		地理歴史・公民		1回目	2回目
質問項目	1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる		3.8	3.7
	2	学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる		3.7	3.7
	3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる		3.5	3.4
	4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）		3.4	3.5
	5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している		3.7	3.7
	6	学習と部活動の両立ができている（部活動所属生徒のみ回答してください）		3.6	3.6
	7	授業のねらいがわかりやすく示されている		3.8	3.8
	8	興味や関心が持て、学力（体力、技能）の向上につながっている		3.7	3.7
	9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が選ばれる		3.7	3.7
	10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）		3.6	3.5
	11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている		3.7	3.8
	12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている		3.6	3.7



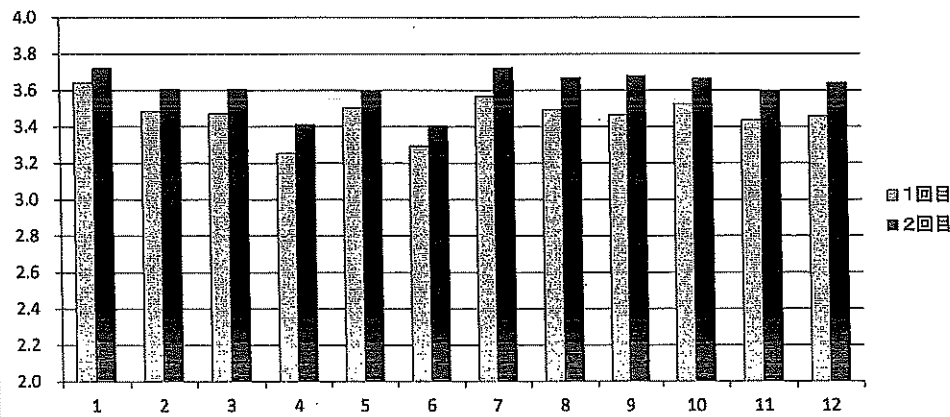
R07 第2回授業アンケート 学年別の平均値

教科名		地理歴史・公民			
		1年生	2年生	3年生	
質問項目	1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.7	3.8	3.8
	2	学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.6	3.8	3.8
	3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.2	3.7	3.8
	4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	2.7	3.5	3.6
	5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.5	3.8	3.8
	6	学習と部活動の両立ができている（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.7	3.7	3.8
	7	授業のねらいがわかりやすく示されている	3.7	3.9	3.9
	8	興味や関心が持て、学力（体力、技能）の向上につながっている	3.7	3.9	3.9
	9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が選ばれる	3.6	3.9	3.9
	10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	3.0	3.6	3.7
	11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている	3.8	3.9	3.8
	12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.5	3.8	3.8



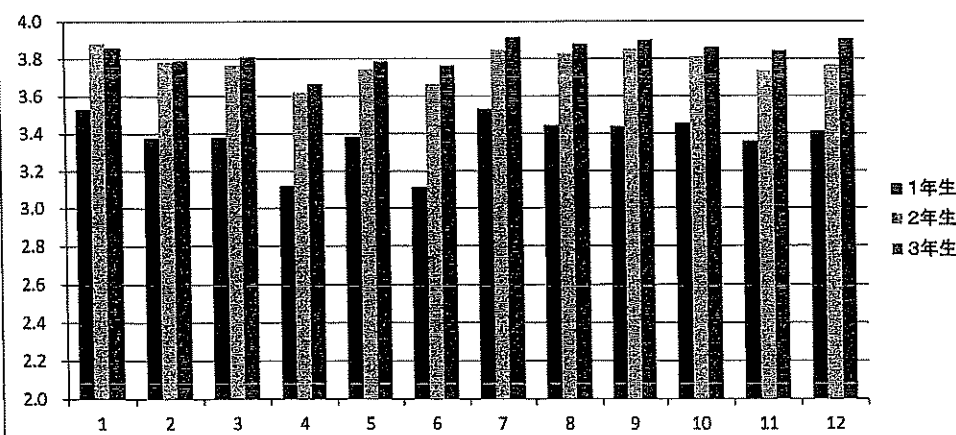
R07 第2回授業アンケート 教科全体の平均値

教科名	数学		1回目	2回目
質問項目	1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.6	3.7
	2	学びへの興味・関心をもち、学力(体力・技能)が向上していると感じる	3.5	3.6
	3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.5	3.6
	4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる(5教科のみで回答してください)	3.3	3.4
	5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.5	3.6
	6	学習と部活動の両立ができています(部活動所属生徒のみ回答してください)	3.3	3.4
	7	授業のねらいがわかりやすく示されている	3.6	3.7
	8	興味や関心が持て、学力(体力・技能)の向上につながっている	3.5	3.7
	9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.5	3.7
	10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている(5教科のみで回答してください)	3.5	3.7
	11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている	3.4	3.6
	12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.5	3.6



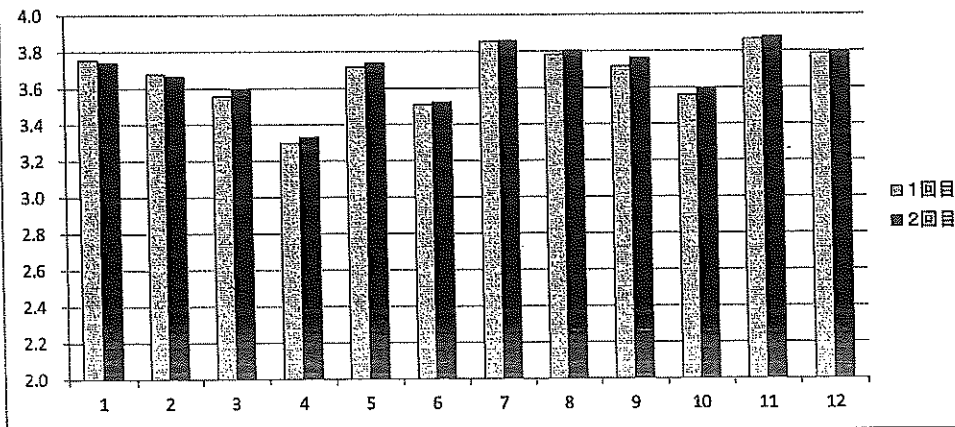
R07 第2回授業アンケート 学年別の平均値

教科名	数学			1年生	2年生	3年生
質問項目	1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる		3.5	3.9	3.9
	2	学びへの興味・関心をもち、学力(体力・技能)が向上していると感じる		3.4	3.8	3.8
	3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる		3.4	3.8	3.8
	4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる(5教科のみで回答してください)		3.1	3.6	3.7
	5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している		3.4	3.7	3.8
	6	学習と部活動の両立ができています(部活動所属生徒のみ回答してください)		3.1	3.7	3.8
	7	授業のねらいがわかりやすく示されている		3.5	3.8	3.9
	8	興味や関心が持て、学力(体力・技能)の向上につながっている		3.4	3.8	3.9
	9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる		3.4	3.8	3.9
	10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている(5教科のみで回答してください)		3.5	3.8	3.9
	11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている		3.4	3.7	3.8
	12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている		3.4	3.8	3.9



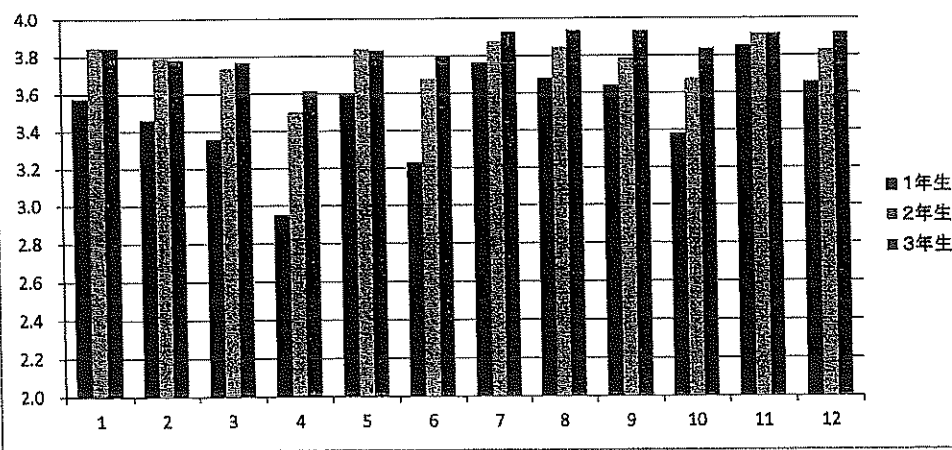
R07 第2回授業アンケート 教科全体の平均値

教科名	理科	回数	
		1回目	2回目
質問項目	1 授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.8	3.7
	2 学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.7	3.7
	3 進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.6	3.6
	4 予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	3.3	3.3
	5 意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.7	3.7
	6 学習と部活動の両立ができている（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.5	3.5
	7 授業のねらいがわかりやすく示されている	3.9	3.9
	8 興味や関心が持て、学力（体力、技能）の向上につながっている	3.8	3.8
	9 将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.7	3.8
	10 予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	3.6	3.6
	11 意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている	3.9	3.9
	12 授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.8	3.8



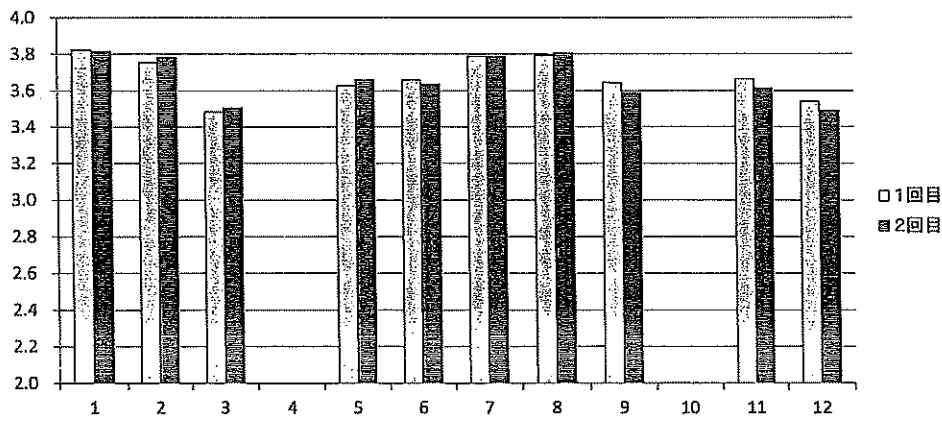
R07 第2回授業アンケート 学年別の平均値

教科名	理科	学年		
		1年生	2年生	3年生
質問項目	1 授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.6	3.8	3.8
	2 学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.5	3.8	3.8
	3 進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.4	3.7	3.8
	4 予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	3.0	3.5	3.6
	5 意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.6	3.8	3.8
	6 学習と部活動の両立ができている（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.2	3.7	3.8
	7 授業のねらいがわかりやすく示されている	3.8	3.9	3.9
	8 興味や関心が持て、学力（体力、技能）の向上につながっている	3.7	3.8	3.9
	9 将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.6	3.8	3.9
	10 予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	3.4	3.7	3.8
	11 意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている	3.8	3.9	3.9
	12 授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.7	3.8	3.9



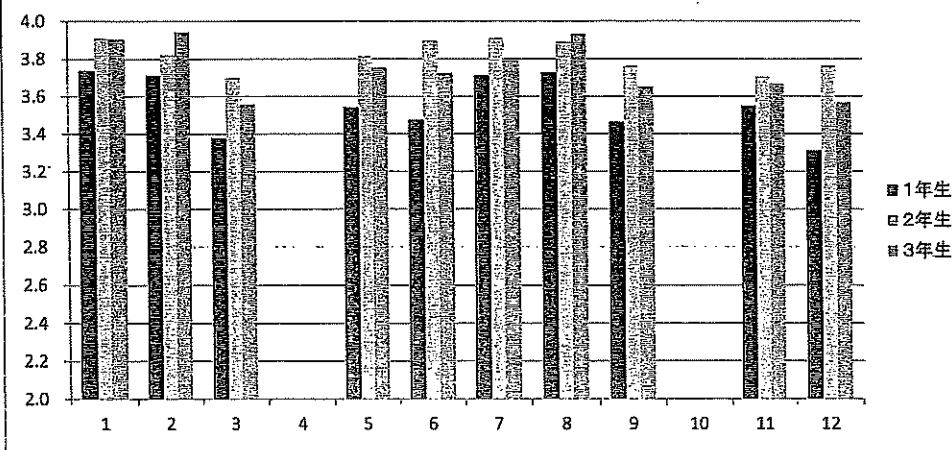
R07 第2回授業アンケート 教科全体の平均値

教科名		保健体育		1回目	2回目
質問項目	1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる		3.8	3.8
	2	学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる		3.8	3.8
	3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる		3.5	3.5
	4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）			
	5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している		3.6	3.7
	6	学習と部活動の両立ができています（部活動所属生徒のみ回答してください）		3.7	3.6
	7	授業のねらいがわかりやすく示されている		3.8	3.8
	8	興味や関心が持て、学力（体力・技能）の向上につながっている		3.8	3.8
	9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる		3.6	3.6
	10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）			
	11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている		3.7	3.6
	12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている		3.5	3.5



R07 第2回授業アンケート 学年別の平均値

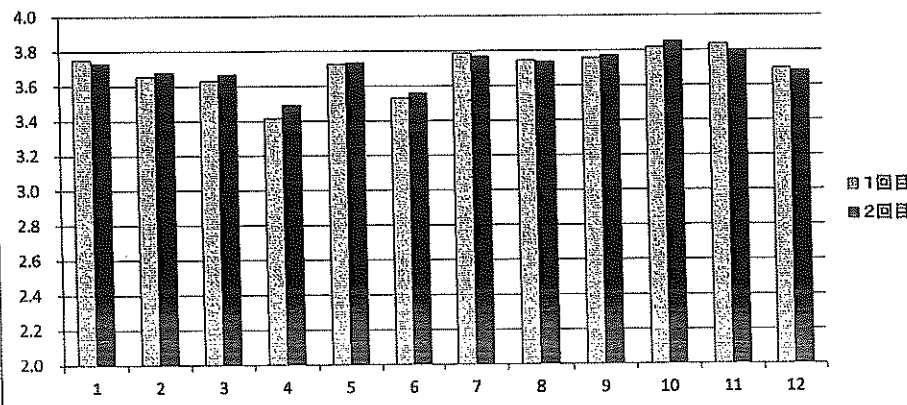
教科名		保健体育			1年生	2年生	3年生
質問項目	1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる			3.7	3.9	3.9
	2	学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる			3.7	3.8	3.9
	3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる			3.4	3.7	3.6
	4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）					
	5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している			3.5	3.8	3.8
	6	学習と部活動の両立ができています（部活動所属生徒のみ回答してください）			3.5	3.9	3.7
	7	授業のねらいがわかりやすく示されている			3.7	3.9	3.8
	8	興味や関心が持て、学力（体力・技能）の向上につながっている			3.7	3.9	3.9
	9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる			3.5	3.8	3.7
	10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）					
	11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている			3.5	3.7	3.7
	12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている			3.3	3.8	3.6



教科主任用シート②

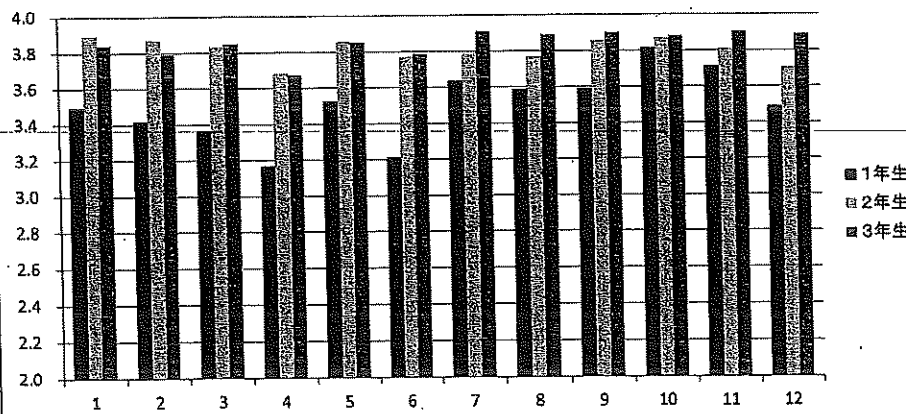
R07 第2回授業アンケート 教科全体の平均値

教科名	外国語（英語）	1回目	2回目
質問項目	1 授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.8	3.7
	2 学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.7	3.7
	3 進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.6	3.7
	4 予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	3.4	3.5
	5 意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.7	3.7
	6 学習と部活動の両立ができている（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.5	3.6
	7 授業のねらいがわかりやすく示されている	3.8	3.8
	8 興味や関心を持って、学力（体力・技能）の向上につながっている	3.7	3.7
	9 将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.8	3.8
	10 予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	3.8	3.9
	11 意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている	3.8	3.8
	12 授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.7	3.7



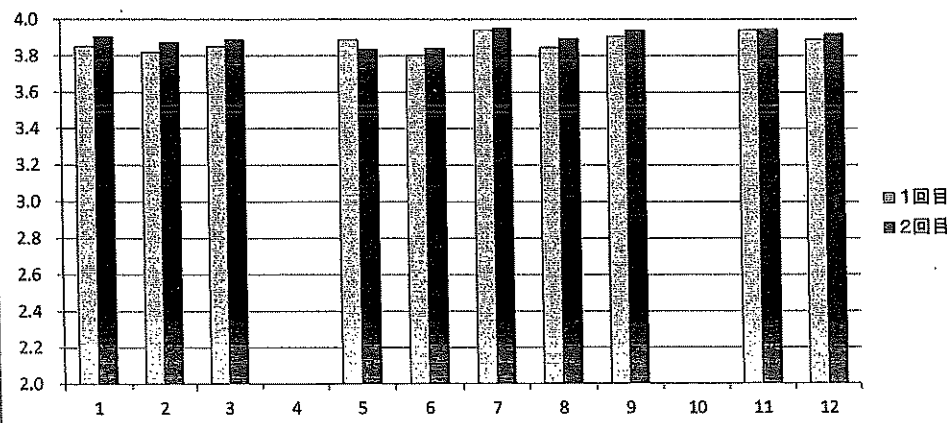
R07 第2回授業アンケート 学年別の平均値

教科名	外国語（英語）	1年生	2年生	3年生
質問項目	1 授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.5	3.9	3.8
	2 学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.4	3.9	3.8
	3 進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.4	3.8	3.8
	4 予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	3.2	3.7	3.7
	5 意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.5	3.9	3.9
	6 学習と部活動の両立ができている（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.2	3.8	3.8
	7 授業のねらいがわかりやすく示されている	3.6	3.8	3.9
	8 興味や関心を持って、学力（体力・技能）の向上につながっている	3.6	3.8	3.9
	9 将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.6	3.9	3.9
	10 予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	3.8	3.9	3.9
	11 意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている	3.7	3.8	3.9
	12 授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.5	3.7	3.9



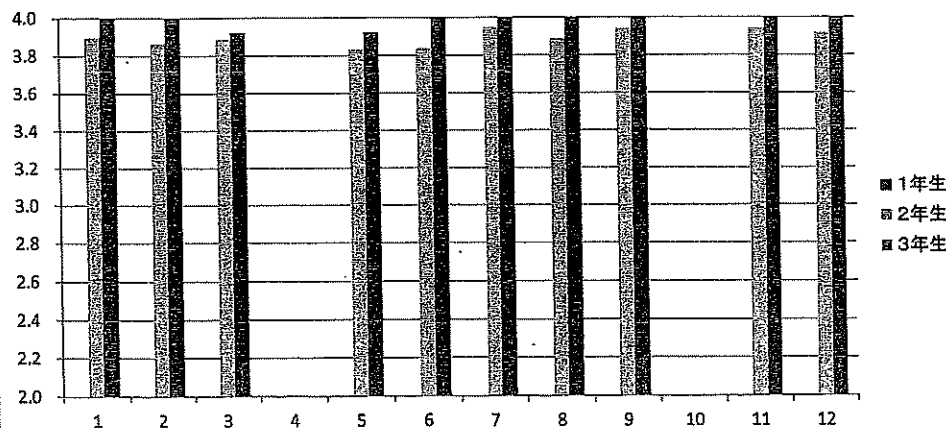
R07 第2回授業アンケート 教科全体の平均値

教科名	家庭		1回目	2回目
質問項目	1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.9	3.9
	2	学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.8	3.9
	3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.9	3.9
	4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	0.0	0.0
	5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.9	3.8
	6	学習と部活動の両立ができている（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.8	3.8
	7	授業のねらいがわかりやすく示されている	3.9	4.0
	8	興味や関心が持て、学力（体力・技能）の向上につながっている	3.8	3.9
	9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.9	3.9
	10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	0.0	0.0
	11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている	3.9	3.9
	12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.9	3.9



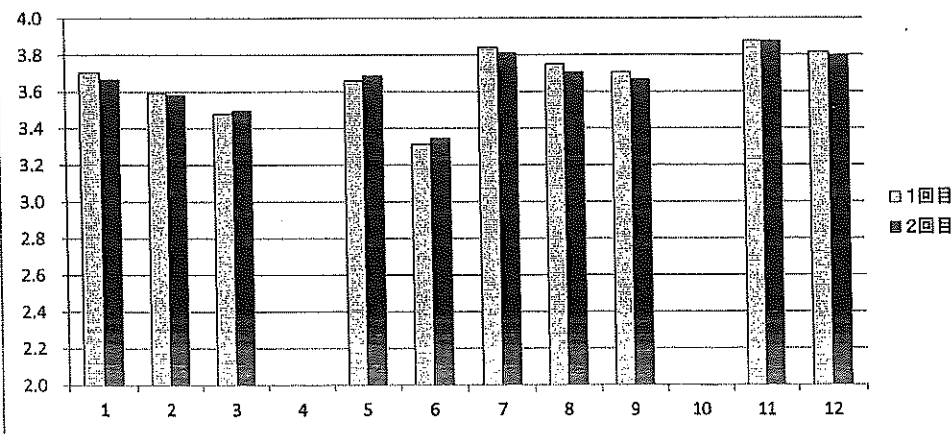
R07 第2回授業アンケート 学年別の平均値

教科名	家庭	1年生	2年生	3年生	
質問項目	1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる		3.9	4.0
	2	学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる		3.9	4.0
	3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる		3.9	3.9
	4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）		0.0	0.0
	5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している		3.8	3.9
	6	学習と部活動の両立ができている（部活動所属生徒のみ回答してください）		3.8	4.0
	7	授業のねらいがわかりやすく示されている		3.9	4.0
	8	興味や関心が持て、学力（体力・技能）の向上につながっている		3.9	4.0
	9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる		3.9	4.0
	10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）		0.0	0.0
	11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が設けられている		3.9	4.0
	12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている		3.9	4.0



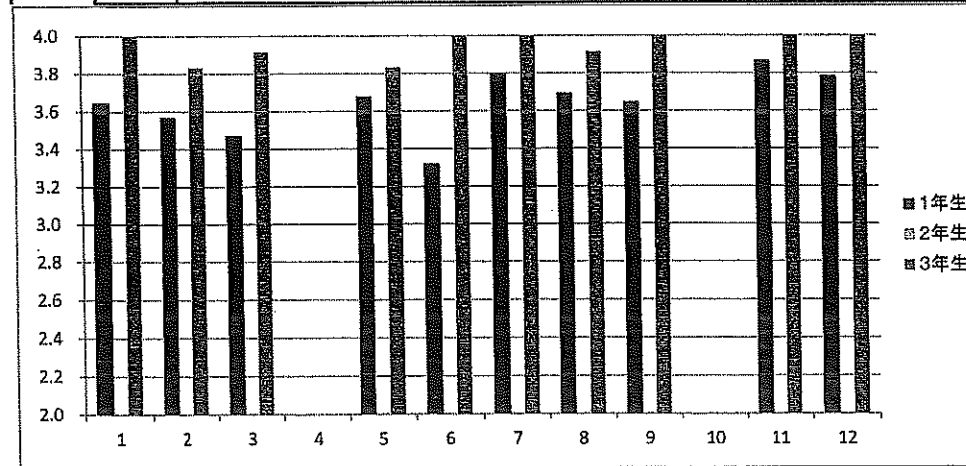
R07 第2回授業アンケート 教科全体の平均値

教科名	情報	1回目	2回目
		1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる
2	学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.6	3.6
3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.5	3.5
4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	#DIV/0!	#DIV/0!
5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.7	3.7
6	学習と部活動の両立ができています（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.3	3.3
7	授業のねらいがわかりやすく示されている	3.8	3.8
8	興味や関心を持って、学力（体力、技能）の向上につながっている	3.7	3.7
9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.7	3.7
10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	#DIV/0!	#DIV/0!
11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が促されている	3.9	3.9
12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.8	3.8



R07 第2回授業アンケート 学年別の平均値

教科名	情報	1年生	2年生	3年生
		1	授業のねらいをふまえ、主体的に取り組んでいる	3.6
2	学びへの興味・関心を持ち、学力（体力・技能）が向上していると感じる	3.6	#DIV/0!	3.8
3	進学したい学校や就きたい職業等を意識して取り組んでいる	3.5	#DIV/0!	3.9
4	予習や復習などの準備をして授業に臨んでいる（5教科のみで回答してください）	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!
5	意見交換、学び合い、発表等の言語活動に主体的に参加している	3.7	#DIV/0!	3.8
6	学習と部活動の両立ができています（部活動所属生徒のみ回答してください）	3.3	#DIV/0!	4.0
7	授業のねらいがわかりやすく示されている	3.8	#DIV/0!	4.0
8	興味や関心を持って、学力（体力、技能）の向上につながっている	3.7	#DIV/0!	3.9
9	将来の進路実現や生き方に役立つような工夫が適宜見られる	3.6	#DIV/0!	4.0
10	予習を前提に授業が効果的に組み立てられている（5教科のみで回答してください）	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!
11	意見交換、学び合い、発表等の言語活動が促されている	3.9	#DIV/0!	4.0
12	授業で学んだことや考えたこと、疑問点を整理し、振り返る時間が設けられている	3.8	#DIV/0!	4.0



1 はじめに

私はこれまで3年間、地理歴史科の非常勤講師として教育現場に携わり、主に教科指導の面から実践を積み重ねてきた。これまでは指導の専門性を高めることが業務の中心であったが、令和7年度に正規採用となり、一人の「教諭」として校務運営や生徒指導、部活動顧問といった、学校組織の根幹をなす多角的な責務を担うこととなった。

採用当初、私は新しい環境への期待を感じると同時に、組織の一員として生徒の人生に深く関わることへの責任の重さを改めて実感していた。講師時代に培った経験を土台としつつも、教諭として求められる「組織を動かす一員としての責任」や「プロとしての自己管理」に対して、いかに自分をアップデートしていくかが大きな課題であった。

この一年間、校内外で受講した多岐にわたる研修は、自身の指導法や教職員としての姿勢を客観的に見つめ直す貴重な機会となり、教諭としての確かな指針を授けてくれるものであった。本稿では、研修を通じて得た「教諭としての使命感」と「地理歴史科における授業改善」を主題として、この一年の歩みを報告する。

2 学校組織の理解と教員としての規範

4月の最初に行われた研修「初任者研修の意義と年間計画」において、研修班主任の佐々木英憲先生よりご指導いただいた内容は、私の組織人としての第一歩を方向付けるものであった。校内研修は、管理職や各分掌主任の先生方の貴重な時間をいただくことで成立する。また、単に受講するだけでなく、事前準備や事後の振り返り等の主体性も求められる。この研修を通じ、教員業務は決して孤立したものではなく、先生方との密接なコミュニケーションの上に成り立つものであると痛感した。

高橋司校長先生による「本校の教育目標と学校運営」の研修では、本校の教育目標が秋田県の教育指針に沿って設定されており、あらゆる授業・行事・学級経営がこれに準拠していることを学んだ。進学校として学力の習得を目指すのみならず、「人格の完成」や「真理の探究」といった大目標を達成するためには、全職員の協働をもって教育活動に取り組んでいく必要がある。また、齊藤雅子教頭先生による服務規程の研修では、休暇制度の理解や書類提出の正確さといった事務的側面から、自己管理を徹底して心身の健康を保つことまで、それらは単なる個人の問題ではなく、生徒に不安を与えないためのプロとしての責務である、ということを教えていただいた。講師時代には意識が及びにくかった「組織を動かす一

員としての責任」と「プロとしての自己管理」を、一連の一般研修を通じて学び取ることができた。

3 地理歴史科における専門性の刷新と実践

教科指導においても、講師時代の「我流」からの脱却が大きなテーマとなった。教科指導員の佐々木英憲先生との教科研修を通じて、進学校における教科指導は、緻密な「カリキュラム・マネジメント」の上に成り立つべきであることを学んだ。まず、必修化された「地理総合」においては、一年間で教科書内容を確実に消化することが大前提となる。定期考査までの有効時数を厳密に検証し、進度表から逆算して年間計画を作成するという実務的な手順は、計画の実現可能性を高める上で不可欠な視点であった。また、「地理探究」では既習事項の復習と大学入試対策をいかに融合させるかという戦略的な視点をご教示いただき、3年間を見通した指導の重要性を痛感した。示範授業においては、教科主任の關友明先生の安定感ある振る舞いや、生徒の意欲を引き出す発問の妙を目の当たりにした。關先生の授業では、解説の中にユーモアを交え、生徒の心を引きつける「メリハリ」が、教室全体の安心感と集中力を生んでいた。

私はこれまで ICT を活用したスライド提示については利用していたものの、授業実践においては、生徒に地図帳や資料集を実際に手に取らせる「自分のものとさせる活用」が不足しているという指摘を佐々木先生から受けた。単なる情報の提示に留まらず、生徒が自ら資料を読み解き、自らの地図帳に情報を蓄積していく「仕掛け」こそが、主体的・対話的で深い学びの鍵であることを学んだ。考査問題作成研修では、自身の作成した問題が難解過ぎ、生徒の目線に立った設問設計や採点基準の設定が不十分であることを痛感した。記述問題の採点基準を事前に明確にしておくことや、印刷時の図の鮮明さへの配慮は、その後の授業づくりにおいても大きな指針となった。

佐々木先生からいただいた「教師自身が楽しむ教材研究が生徒の主体性を引き出す」という言葉は、多忙な日々を追われ義務感で教材研究を行っていた私に、教育の原点を思い出させてくれるものであった。

4 多様な教育的ニーズへの対応と生徒理解の深化

今年度、自身の視野を飛躍的に広げたのは、特別支援学校訪問研修や総合教育センター研修を通じた「個」へのまなざしの変容であった。秋田県立ゆり支援学校での訪問研修では、「生活全体を見据える教育」の重要性を痛感した。寄宿舎での徹底した生活習慣の指導や、高等部の作業学習で見せた生徒たちの職業人としての高い自覚、そして「できる力」

を信じて粘り強く寄り添う教員の姿勢は、高等学校の通常学級においても不可欠な要素である。特に、作業学習において自己チェックを厳しく行いながら組子バインダーを製作する生徒の姿は、目標を明確にし、達成感を積み重ねさせる教育の力を物語っていた。この学びは、「あきたアドベンチャープログラム(AAP)研修」で得たファシリテーションの視点とも強く合致する。「助言を与えず、個々の主体性を引き出す」という手法は、特別支援教育における個別最適な支援のあり方にも通じるものであり、コミュニケーションに消極的な生徒に対しても、その個性を尊重し、良さを認める関わりの重要性を再認識させてくれた。

秋田明德館高校における研修の一環として参加・拝聴した「生活体験発表会」や授業参観では、不登校や葛藤を乗り越えて自立を目指す生徒たちの言葉に触れ、教員が一人ひとりの背景に寄り添うことの重みを学んだ。明德館高校長が説かれた「生徒の小さな成長に気づく大切さ」や「教師の言葉は一生残る」という教えは、現在の勤務校においても、表層的な行動の奥にある生徒の思いに想像力を働かせ、一つひとつの対話を大切にしようとする姿勢の礎となっている。

5 ICTを活用した探究学習

校務分掌として情報管理部に配属されたことは、教科指導におけるICT活用の幅を広げる大きな契機となった。校内のICT環境の保守・運用に携わる中で、デジタルツールの利便性と同時に、視覚情報の多い地理資料においてデジタル教材をいかにユニバーサルデザインの視点で活用すべきか、という新たな視座を得ることができた。

十二月に実施した研究授業では、「地震・津波と防災」をテーマに、地理院地図(GIS)を用いた探究学習を展開した。地元・由利本荘地域の浸水想定や避難場所を、生徒自らの操作で分析させることで、地理的知識が実生活に直結することを伝える意図であった。ICTを活用することで、従来の紙の地図では困難だった情報の重ね合わせが可能になり、生徒の発見的な学びを支えることができた。しかし、事後の研究協議では、「ペアで相談し、気づきを共有する時間」の確保が不十分であったという課題が明確になった。AAP研修で学んだ「助言を与えず、生徒の思考を待つ」という姿勢や、特別支援研修で学んだ「個々のペースに合わせた粘り強い支援」が、本番の緊張感の中で欠落してしまったのである。時間を意識するあまり、自身の説明を優先してしまったことは大きな反省点である。今後は、生徒自身の操作による「気づき」を尊重する時間配分を再考し、主体的・対話的で深い学びを具現化できるよう授業構成の修養を重ねていきたい。

6 おわりに

一年間の初任者研修を振り返り、私は講師時代の「授業完結型」の視点から、学校という組織、そして生徒の人生という大きな流れに関わる「教諭」としての視点へと、ようやく転換することができた。生徒のBYODも本格化するなかでのICT活用支援や、ヨット部顧問としての部活動指導、そして多様な校内および校外研修。これら全ての経験が、生徒に何を伝えるべきかという問いに対する、私なりの答えの一部となっている。地歴科の授業は、単なる知識の伝達に留まらず、現代社会の諸課題を多面的・多角的に考察する力を養い、多様な他者と共に生きる力を育てる場である。そのためには、教師自身が社会情勢に敏感であり続け、生徒一人ひとりの「困り感」や「可能性」に寄り添いながら、教材研究を「楽しむ」姿勢が不可欠である。

末筆ながら、多忙な中で粘り強く、時に厳しく温かいご指導をくださった指導教員および教科指導員の佐々木英憲先生、教科主任の關友明先生をはじめとする本校の諸先生方、そして総合教育センターや訪問校の皆様深く感謝申し上げます。この一年で得た「生徒からスタートする」という謙虚な姿勢を生涯持ち続け、研鑽を積んでいく決意である。

令和7年度 初任者研修を終えて

教諭 櫻田 隆輝

1 はじめに

秋田県立本荘高等学校の教諭として採用され、教育活動に携わることとなった今年度当初、私は大きな期待とともに、不安を抱いていた。授業実践のみならず、校務分掌、行事運営、部活動指導といった多岐にわたる教職員の業務に対し、一人の責任ある当事者として関わることの重圧を感じていたからである。しかし、この一年間の研修期間を通じ、校内外の諸先生方から丁寧なご指導を仰ぐ中で、単なる知識や技術の習得に留まらない、教諭としての本質的な気づきを得ることができた。特に、教員としての専門性とは、単に教科内容を伝達することではなく、生徒一人ひとりの「困り感」に寄り添い、彼らが自律的に未来を切り拓く力を育む伴走者であることだと再認識するに至った。本稿では、一年間の多層的な研修から得た知見を整理し、それが今後の教員生活においてどのような意味を持ち、生徒のためにどう還元されるべきかを主題として報告を行う。

2 高校教育課主幹研修について

校外での実習や他校種参観を中心とした本研修は、生徒を多角的に捉える視点と、授業を設計するメタ的な目線を授けるものであった。

◎AP研修（宿泊）：他者との信頼構築と「説明の設計」

二日間にわたる宿泊研修を通じ、最も強く実感したのは「明確な課題設定」と「適切な説明」がもたらす集団の活性化である。研修内の諸活動は他者との意思疎通なしには達成できないよう設計されており、信頼関係の構築が課題解決の土台であることを学んだ。これは、英語の授業におけるペアワークやグループ学習においても同様である。教員が一方的に指示を出すのではなく、生徒が「何をすべきか」という目標を共有し、あえて情報量を調整することで生徒同士の思考や対話を促す手法は、今後の授業実践における大きな指針となる。今後は生徒が自ら考え、他者と協力して答えを導き出すプロセスを重視することで、教室内に「心理的安全性を確保した学びの場」を構築することを目指したい。

◎ゆり支援学校への訪問：社会的自立を支える「横断的指導」

特別支援教育の現場では、教科の枠を超えた「横断的な指導カリキュラム」が生まれ、生徒が掃除や洗濯などの家事を自ら行うなど、「自分なりに力を発揮できる状態」を目指す指導が徹底されていた。現代の普通高校においても、発達障害等の「困り感」を抱える生徒は少なくない。ここでの学びは、単に英語を教えるという視点ではなく、「この生徒が社会で自立するために、今どのような支援が必要か」という広い視野を持つことの重要性を示した。生徒を「困った生徒」として見るのではなく、「困っている生徒」と捉え、誰一人取り残さない学級運営を目指していく。

◎秋田明徳館高校での見学：完璧主義からの脱却と「協働的な学び」

校長講話における「授業は90点で良い。残りは生徒とつくるもの」という言葉は、自身の授業観を根本から揺さぶるものであった。これまでは授業を完璧に準備し、コントロールすることに固執していたが、それは生徒の学びのチャンスを奪っていた可能性に気づかされた。多様な教育的ニーズを持つ生徒が集まる現場では、教員が一人で抱え込むのではなく、生徒とともに学びを形成していく柔軟性が求められる。今後は、生徒の表情や反応を鋭敏に

観察し、彼らとのやりとりの中で授業をブラッシュアップしていく「余白」のある指導を心がけていく。

3 秋田県総合教育センター主幹研修について

全十期に及ぶセンター研修は、教員としての基盤を構築し、実践と省察を繰り返す貴重な場となった。

◎サービスの遵守と教員としての自覚（第Ⅰ～Ⅲ期）

「全体の奉仕者」としての規則遵守、公務員という身分の重みを学び、教育者である前に社会人として厳格な律し方が求められることを再認識した。また、学習指導要領における「生きる力」を具現化するためには、「目標と評価の整合性」が取れた指導案の作成が不可欠であることを学び、日々の授業の「軸」を定めることの重要性を痛感した。

◎授業づくりと生徒理解（第Ⅳ～Ⅶ期）

中高合同研修では、中学校の教員が生徒の変容をいかに細かく見据えて計画を立てているかを知り、大きな衝撃を受けた。既習事項との関連や興味を惹きつける活動の豊富さを目の当たりにし、高校教育においても「生徒が勉強できたという実感」を持てる工夫が必要であると感じた。また、いじめや不登校の研修では、些細な変化を見逃さない観察眼と、組織で即座に共有する連携の重要性を学んだ。生徒指導において教員がチームとして機能することの意義を理解したことは、今後の学校運営に関わる上で大きな財産となる。

◎授業実践の深化と教育相談（第Ⅷ～Ⅹ期）

授業実践研修では、導入と展開の接続や、インプットとアウトプットのバランスの難しさを痛感した。言語活動が「単なる作業」で終わらないよう、生徒にどのような変容をもたらしたいのかという「ゴール」を明確にすることの重要性を学んだ。また、最終期に示された「相談は既に始まっている」という言葉は、教育相談への意識を一変させた。問題が生じてから対応するのではなく、日頃の挨拶や授業中の何気ないコミュニケーションの積み重ねこそが、生徒の「困りごと」を吸い上げる土壌になる。生徒が安心して本音を吐露できる関係性を、日々の教室の中で築くことが肝要である。

4 校内研修について

本校の先輩教員や管理職から直接指導を仰いだ校内研修は、最も実践的であり、日常を支える指針となった。

◎教員としての使命感と信頼関係の構築

校長からは、「自身の言動を絶えず客観的に捉える」ことの重要性を教示いただいた。どれほど正当な指導であっても、生徒との信頼関係が欠如していれば、それは暴言や体罰と受け取られかねないという指摘は、身の引き締まる思いであった。来年度以降、学級担任を預かる際にも、この言葉を胸に、生徒の輪の中に積極的に飛び込み、一人ひとりと向き合うことを最優先する。また、職員間のコミュニケーションを密にし、組織全体の教育力を高める一翼を担う存在でありたい。

◎英語科としての授業づくりと評価の在り方

教科指導員の佐川先生からは、進学校における英語指導の厳しさと醍醐味を教示いただいた。年間計画においては、大学入学共通テストを見据えた語彙・リスニング・読解の強化を図る一方で、進度と定着度の間で柔軟に調整する難しさを学んだ。特に印象的であったのは、「考査問題は生徒へのメッセージである」という教えである。単なる選別のための道具

ではなく、考査を通じて何を身につけてほしいのかという意図を込めるべきだという視点は、教材研究の在り方を大きく変えた。さらに、教科指導の中で示された「仕掛けを作ったらあとは生徒の可能性を信じて任せる」という「何もしない授業」の理想像に触れたことは、大きな収穫であった。教え込むのではなく、生徒の自主的な学びを支援し、思考を妨げない絶妙な支援の程度を今後も探求し続けていく。

5 おわりに

一年間にわたる初任者研修は、私にとって教員としての根幹を築く極めて濃密な時間であった。特に英語科教諭として、今後の授業実践において追求すべき課題と、大切にすべき指導姿勢が明確になった。

第一に、「共通テスト対策」と「キャリア教育」の止揚である。本校は進学校であり、大学入学共通テストを見据えた語彙力、リスニング力、読解力の向上は喫緊の課題である。しかし、英語は単なる受験の道具ではなく、生徒が将来、社会人や地域の一員として自立し、多様な役割を果たすための「キャリア」を支える重要なツールでもある。したがって、単なる知識の伝達に終始せず、生徒が「将来の社会を担う人材」として成長できるような、人格形成をも見据えた指導を追求していきたい。

第二に、授業の「質的改善」と「教員の役割」の再定義である。これまでの授業は教員側の説明が冗長になりやすく、生徒のアウトプット量が不足していたという反省がある。今後は、授業の「導入」を、生徒を学びの世界へ引き込む「勝負所」と位置づけ、その時間の「ゴール」を生徒と明確に共有する。さらに、佐川先生から示唆された「仕掛けをつくったら教員は何もしない」という理想像に向け、生徒の可能性を信じて学びを委ねる勇氣を持ちたい。綿密な教材研究に基づき、ICT（Google Forms等）を効果的に活用して個別最適化された支援を行いながら、生徒が主体的に思考し、協働的に学びを形成できる「余白」のある授業をデザインしていく。

第三に、「生徒理解」を基盤とした学級・授業運営である。特別支援学校訪問や各研修を通じ、生徒が抱える「困り感」に対する想像力の重要性を学んだ。1クラスに一定数存在する、発達障害等による困難を抱える生徒を取り残さないよう、授業のユニバーサルデザイン化を実践していく。また、「相談は既に始まっている」という言葉を肝に銘じ、問題が起きてから対応するのではなく、日頃の挨拶や授業中の何気ないコミュニケーションを通じて信頼関係を構築することが、深い学びの土台となると確信している。生徒の些細な変化に気づける観察眼を養い、背景にある心の痛みに寄り添える教員でありたい。

最後になったが、この一年間、未熟な私を導いてくださった指導教員の佐々木英憲先生、教科指導員の佐川宏先生、そして温かく支えてくださった本荘高等学校の諸先輩方に深く感謝申し上げます。研修で得た最大の収穫は、完成された指導技術ではなく、自身の指導を客観的に捉え、絶えず「試行・自己評価・改善」を繰り返すという「学び続ける姿勢」そのものである。今後も、生徒第一の精神を忘れず、情熱と使命感を持って教育活動に邁進する所存である。

令和7年度中堅教諭等資質向上研修を終えて

教諭 藤原 直哉

1. はじめに

私は、東京都立高等学校、東京都立中等教育学校で9年間勤務し、今年度で本県採用2年目を迎えている。約10年間、教科指導や学級経営、分掌業務、部活動指導等を通して、様々な経験をしてきた。しかしながら、その経験をじっくりと振り返る機会は少なかった。中堅教諭等資質向上研修では、校内外の様々な場で新たな経験や学びを得るとともに、これまでを振り返り、教員としての今後のキャリアを考えることができた。研修の内容は多岐にわたるが、本稿では、校外研修、選択研修、特定課題研究について報告する。

2. 校外研修の日程・内容

日程	名称	内容	会場
4/17 (木)	基礎研修	<ul style="list-style-type: none"> ・ ガイダンス ・ 情報交換 	総合教育センター
6/24 (火)	I期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開講式 ・ 教育公務員の服務（講義・演習） ・ 学校の危機管理（講義・演習） ・ 質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略（講義・演習） 	オンライン実施
7/30(水) ~31(木)	選択研修	<ul style="list-style-type: none"> ・ 異なる職種での社会体験 	いとく新国道店
8/5 (火)	II期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高い専門性に基づく教科指導の充実と推進（講義・協議・演習） 	総合教育センター
9/3 (水)	授業研修	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業実践 第2学年古典探究「複数の文章と関連付けて古典の解釈を深めよう」（『枕草子』『雪のいと高う降りたるを』） ・ 授業参観、協議 	県立秋田南高等学校
9/18 (木)	III期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人間としての在り方生き方を考える道徳教育（講義・協議・演習） ・ いじめの理解と対応（講義） ・ 気になる生徒の事例を通じた具体的対応の理解（講義・協議） 	総合教育センター
10/21 (火)	IV期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校全体で取り組む情報教育（講義・演習） ・ キャリア教育の推進（協議） ・ 学校組織の一員としてーキャリアデザイナーー（講義・演習） ・ これからの学校教育（講話） ・ 閉講式 	総合教育センター

3. 選択研修

(1) 研修先

株式会社伊徳 いとく新国道店

(2) 研修の概要

日程	研修内容
7/30 (水) 8:00~17:00	ガイダンス、店内巡視同行、店舗ミーティング、マネージャーミーティング、部門別体験（グロサリー、惣菜、日配）
7/31 (木) 8:00~17:00	店舗ミーティング、部門別体験（グロサリー、青果、惣菜、日配）、振り返り

(3) 研修の成果

本研修では、「コーチングマインド」について学んだ。

コーチングマインドとは、相手の可能性を信じ、主体的な成長を促す関わり方や姿勢のことをいう。いとくでは、上司から部下へ一方的に言って聞かせることよりも、「問いかけて考えさせて気付かせること」に価値を置いている。従業員に対して、コーチングを実践することで、信頼関係を築くとともに自律的成長を促すことができる。

いとくは、この「コーチングマインド」を大切にしている。その成果は、売り場づくりあらわれている。創意工夫に満ちた売り場は、店舗の所在する地域の需要や志向について自ら考え、工夫して売り場づくりをしている成果である。

コーチングを実践する上で意識すべきことは、以下の4つである。

① 可能性を信じる	成長できると信じ、答えを与えるのではなく、力を引き出す。
② 傾聴する	言葉の裏にある感情や価値観に注目し、共感しながら耳を傾ける。
③ 問いかける	指示や命令ではなく、考えさせ、気付かせる。
④ 承認する	「やろうとしたこと」も価値として認める。

店長やマネージャーや担当社員の方は、店内を巡回し、「あの陳列、素敵だね」「運ぶの大変だったよね。お疲れ様」「手際がいいね」「きれいに作れているね」と声をかけていた。承認することは、従業員のやる気を引き出すことにつながる。「承認する」とは、努力や姿勢、過程であり、などを認め、それを言葉で伝えることだと改めて気付くことができた。

教職は対人援助職である。コーチングマインドを活かしたい場面がたくさんある。生徒の可能性を信じ、問いかけ、考えさせ、承認することを、日々の指導・支援に意図的に取り入れ、生徒の可能性を引き出していきたい。

4. 特定課題研究

(1) 研究テーマ

高等学校における特別支援教育の推進について

(2) 研究の概要

2018年4月から、高等学校でも「通級による指導」が制度化された。これを受け、秋田県教育委員会は2018年4月に「通級による指導の手引き」を改訂し、指導の指針を示した。県内では、県立大館鳳鳴高等学校、県立秋田明德館高等学校および県立横手高等学校の各定時制課程に「通級指導教室」が設置され、通級による指導が実施されている。また、秋田県教育委員会が2023年1月に策定した「第四次秋田県特別支援教育総合整備計画」では、高等学校では、発達障害のある生徒の数が増加していること、通常の学級においても、特別の支援を必要とする幼児児童生徒が在籍している可能性があることが示されている。全ての教職員が特別支援教育について十分理解し、実践することが求められている。

特別支援教育を推進する上では、専門性を有する校内外の人材と連携することが重要である。

しかしながら、学校現場において校内外のチーム体制を築いて連携していく上で課題もある。小田(2021)は、医療現場における連携の目的は患者の治療とケアに置かれるのに対して、学校現場における連携の目的は曖昧であることを指摘している。そして、その曖昧さが故に、学校現場では連携が進まないのだという。

では、特別支援教育における連携の目的を明確にするにはどうすればよいか。その方策一つが、個別の教育支援計画および個別の指導計画の作成により支援の目的を明確化することである。個別の教育支援計画および個別に指導計画には「支援の目標」の記載欄があり、これを活用したい。

ただし、計画の欄を記入するだけで、望ましい連携が実現するわけではない。藤井・高田屋(2017)によるA県の特別支援学校8校の教員を対象とした質問紙調査では、「多くの教員が計画の作成に負担を感じていたものの、有効に活用されていない実態」が明らかとなった。このような負担感が生じる背景に、「年度当初の多忙極まる時期に作成されていること」が挙げられるという。

個別の教育支援計画および個別の指導計画は、作成それ自体が目的ではない。支援の目標を明らかにし、校内外の連携に役立てたい。そのためには、担任等が生徒・保護者との面談を行い、その中で計画を作成していくことが望ましい。これを実践するためには、校務を精選し、指導や支援に注力できる基盤をつくる必要もあるだろう。

連携を図ることは、特別支援教育の推進に不可欠である。秋田県教育委員会が2018年4月に改訂した「通級による指導の手引」では、「各教科の内容を取り扱いながら障害に応じた特別の指導を行う場合には、当該教科の免許状を有する教員も参画して、個別の指導計画の作

成や指導を行うことが望ましい」とされている。教科担任制の高等学校においては、複数の教科担任と連携する必要がある。その際、指導や支援の目標を明確にし、校内外との連携を密にし、指導や支援をより効果的なものにしていきたい。

引用文献

藤井 慶博, & 高田屋 陽子 (2017). 個別の教育支援計画の作成と活用に関する現状と今後の方策—特別支援学校教員に対する質問紙調査から—, 秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門, 72, pp. 93-101

堀田 千絵, & 吉岡 尚孝 (2021). 教育におけるユニバーサルデザインアプローチの動向 (1) —インクルーシブ教育システムを基底として—, 人間環境学研究, 19, pp. 73-81

小田 郁予 (2021). 学校における多職種連携研究の課題と展望—連携概念の定義と連携研究を捉える視点—, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 61, pp. 353-364

5. 中堅教諭等資質向上研修のまとめ

本研修を通して、校内外の多くの先生方からたくさんの御指導・御助言をいただいた。

授業研修では、母校で恩師に見守られながら授業をさせていただいた。この貴重な経験から、授業力向上への意欲をより一層高めることができた。

選択研修では、コーチングについての実践的な理解を得ることができた。いづく新国道店はよく利用する店舗である。来店する度に学んだことを想起している。そして、特定課題研究では、特別支援教育についての知見を深めた。研修の大半を現在在学している放送大学で行った。大学の卒業要件を満たすとともに、教員検定による「特別支援学校教諭二種免許状」および公益社団法人日本心理学会の「認定心理士」資格の取得申請の単位を得ることもできた。

校内研修では、校長先生、教頭先生をはじめ教科主任、各分掌主任等の先生方から貴重なお話を伺い、秋田県の教育について理解を深めることができた。校外の集合研修等を通じ、他校の先生方との関わりをもてたことも書き記しておきたい。私は、教職経験の大半を県外の学校で過ごし、本県での勤務は2年目である。そんな私が「同期」と呼びたくなる仲間をもつことができた。これは望外の喜びである。

中堅教諭に求められる能力や果たすべき役割を自覚し、これからも日々研鑽を重ねていきたい。

最後に、御指導いただいた校内外の先生方、授業研修の会場校として御協力くださった県立秋田南高等学校の先生方、高校教育課の物部指導主事に深く感謝申し上げます。

総合教育センター研修 A-25 実践的指導力発展研修講座

理科 中村 真紀子

日時	令和7年8月4日(月) 10:00~16:15
場所	秋田県総合教育センター
日程	10:00~10:15 挨拶 秋田県総合教育センター 主幹 阿部 光教 10:15~12:00 実践的指導力発展講座① -キャリアデザイン- 秋田県総合教育センター 主任指導主事 伊藤 文子 13:00~14:30 実践的指導力破天荒座② -コーチングの基礎- 秋田県総合教育センター スーパーアドバイザー 安田 和人 14:45~16:05 学校組織の一員として 秋田県総合教育センター スーパーアドバイザー 湯浅 寛 16:05~16:15 リフレクション

所見 この講座は特定主任未経験者の年齢指定の研修であり、以前同職した先生方や高校の同級生も出席しており、懐かしい雰囲気の中でリラックスして受講することができた。

最初のキャリアデザインに関する講座では、教職に就くまでの過程やこれまでの仕事の満足度をまとめることで、自分の職務を客観的に振り返ることができた。希望していなかった転勤のタイミングで仕事へのモチベーションが下がることが分かった。過去は変えられないが過去から学ぶことは多くあるので、これからの職務にしっかりと生かしていきたいと思う。

午後のコーチングに関する講座では、コーチングに関する具体的な方法を学んだ。生徒に対するコーチング、新任教員に対するコーチングそれぞれについて、ロールプレイングを通して実践的に理解することができた。これまでの生徒、保護者との面談を振り返り、反省すべき点が多く見つかった。職場で若手と接する場面でも注意していきたいと思った。

3コマ目の講座では、「思っていることを言わない。考えたことを話す」という内容が心に残った。1コマ目、2コマ目の講義・演習との共通点もあり、この日の研修内容を多角的に理解することができた。学校組織の一員として何をすべきかを再確認し、仕事への意欲が高まった。

今回の研修では校務と並行してのレポート作成に時間がかかり、また、部活動の強化練習会が重なっていたため、参加にはあまり前向きになれなかった。しかし、学ぶべきことが多く大変有意義な研修であったと思う。自分の職務だけで精一杯になりがちであったが、「若手教員の育成」という視点を意識することができたと思う。

県立学校新任教務主任研修を終えて

教諭 櫻庭 明央

1 はじめに

今年度、初めて教務主任として学校運営に深く関わることになり、県立学校新任教務主任研修に参加した。本研修では教務主任の職務と役割を学ぶとともに、学校運営を円滑かつ適切に推進する立場として必要な能力を理解し、高めることを目標とした。

2 研修の日程・内容

【第Ⅰ期】5月27日（火）

○学校の組織力向上と教務主任の役割

秋田県総合教育センター スーパーアドバイザー 湯澤寛

○これからの秋田県学校教育と教務主任への期待

秋田県教育庁高校教育課 管理主事 柴田創一郎

○学校運営に生かすコーチングマインド

秋田県総合教育センター 主幹 阿部光教

最初の講義では、自身がこれまで教員として積み重ねてきたものを振り返って考える機会があり、自身の強みやポリシーについて再確認することができた。今後、一人の教員として学校をどのようにしていきたいかということ、少し落ち着いて考えられたように思う。教務主任に求められる役割は数多くあるが、大事なことはただ業務をこなすことではなく、周囲と協働しながら組織としてより良い方向に向かって進んでいくことだと改めて学んだ。

また、秋田県の教育施策を改めて確認し、日々の業務や取組がそれらに基づいて実施されていることを再認識した。校内の諸活動の目的を明確に捉え、教育効果を高めるためにも、秋田県全体の今後を見据えた広い視野をもっておくことが大切であると感じた。また、教員（教務主任）として行っている業務の法的根拠についても、実例を示しながら詳しく解説していただいた。今後、教務主任として周囲に指導・助言する機会や、学校の運営に携わる機会も想定し、しっかりと根拠に基づいた提案ができるようにしておきたい。

最後の「コーチング」については、教務主任として周囲にアプローチする際の効果的な手法を学ぶことができ、大変参考になった。相手の考えを整理して引き出すことができれば、先生方に対する適切な助言はもちろんのこと、より多くの意見やアイデアを反映した取組ができ、非常に有意義である。また、教育目標の「チャンクダウン」という考え方も非常にわかりやすく、目標に対する行動を明確かつ具体的にする上で有効であると感じた。学校目標を実現するという教務主任の大事な役割を果たせるよう、積極的に実践していきたい。

【第Ⅱ期】 10月23日（木）

○カリキュラム・マネジメント

秋田県総合教育センター 指導主事 佐々木直樹

○チームで取り組む特別支援教育

秋田県総合教育センター 主任指導主事 高橋亜希子

○教務運営に関する課題と解決への取組

秋田県総合教育センター スーパーアドバイザー 湯澤寛

指導主事 木村ふさ子

自校の現状を客観的に捉えることで、学校目標の実現のためにどのような手立て、進め方で取り組むべきか少し整理できたように思う。特に、SWOT分析によって強みと弱みをしっかりと認識できたことで、これからどのような生徒をどのように育てていくべきか具体的に考えられたことは非常に有意義であったと感じている。「カリキュラム・マネジメント」は特別なことではなく、このような現状をしっかりと見つめることが土台となることを理解でき、充実した学びとなった。

特別支援教育については、自分が担任として生徒と直接対峙していたときには、もう少し学校全体で組織として進めるべきと考えていたものだったが、今の立場になってその意識が低くなっていたことに気づかされた。一部の教員に負担が偏ることがないように、全体を捉えながら調整を意識して、しっかりと「チーム」を構築する一助になりたいと思う。

最後の「教務運営に関する課題と解決への取組」については、事前に自校の現状についてまとめるレポートが課された。これにより、漠然と捉えていた問題意識を明瞭にすることができたように思う。この自校の課題について具体的な助言をいただいたことも大変参考になるものであったし、他校で抱える課題からも貴重な気づきを得ることができた。今後も様々な課題に直面すると思うが、決して一人で対応するのではなく、組織として多くの先生方と協働しながら進めていきたい。

3 研修を終えて

本研修を通して、多くの先生方からご指導・ご助言をいただくことができた。教務主任といえば、「教務内規の番人」とよばれるようなルールを管理する役割ももちろんあるが、研修を終えた今、何より大事なことは学校目標の実現にむけて中心的な仕事を果たすことだと学ぶことができた。時にはリーダーとして周囲を主導し、時には調整役として組織全体のバランスをとるという非常に難しい役割ではあるが、今後も研修で得られた学びの積極的な実践を心がけ、周囲としっかりとコミュニケーションをとり協働しながら様々な課題に対応していきたいと考えている。

高等学校新任学年主任研修講座について

教諭 長谷部 亮

1. はじめに

本年度、学年主任という重責を担うこととなり、個々の生徒への対応に加え、学年集団の形成や学年経営、組織マネジメントという新たな視点が求められるようになった。また、日々の業務に追われる中で、「いかにして生徒たちの自主自律の精神を養い、主体的に学ぶ集団をつくるか」という課題や、中・長期的な展望をもった学年運営について苦慮することも少なくなかった。本研修は、学年主任としての役割を再確認し、リーダーシップや組織運営の具体的な手法を学ぶことを目的として参加した。

2. 研修の日程・内容

5月16日（金）研修講座I

○望まれる学年主任像と学年主任の役割（講話）

秋田県総合教育センター スーパーアドバイザー 湯澤 寛

○生徒指導における学年主任の役割（講義・演習）

秋田県総合教育センター 指導主事 高橋 真理奈

○思春期の揺れと成長を共に歩む（講話）

秋田赤十字病院心療センター 公認心理師 丸山 真理子

6月27日（金）研修講座II

○学年経営と組織マネジメントの基礎（講義・演習・協議）

秋田県総合教育センター 指導主事 八柳 英子

秋田県総合教育センター 指導主事 木村 ふさ子

○特別活動を要としたキャリア教育の推進（公開講演）

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 長田 徹

○学年経営の実際と運営（講義・協議）

秋田県総合教育センター 指導主事 八柳 英子

秋田県総合教育センター 指導主事 木村 ふさ子

【研修講座Ⅰ】

① 組織を動かす学年主任の役割と姿勢

学年主任には、学年の方向性を「見える化」し、進むべき指針を示す舵取りのような役割が求められる。課題に直面した際、批判や原因追及に終始するのではなく、「どうすれば改善できるか」という未来志向の解決策に焦点を絞る重要性を学んだ。

また、教職員や生徒との信頼関係を築く基礎は、日々の「観察」と「承認」にある。それぞれの頑張りや小さな変化を見逃さず、声かけや共感、ねぎらいを積み重ねることが、組織の心理的安全性を高めることにつながる。主任として発言する際は、「感情のままに思いをぶつける」のではなく、一歩立ち止まって「信念に基づいた考えを話す」ことが大切である。不測の事態にも動じない「自分自身の軸」を確立する必要がある。

② 生徒指導における未然防止とチーム対応

生徒指導の根幹は「生徒理解」にあり、事案が発生してからの対応以上に、未然防止への取組が重要である。研修内のグループ協議では、いじめ防止、不登校支援、保護者連携について多角的な視点から情報を共有し、現場での実践に即した新たな気づきを得ることができた。特に、困難な事案ほど一人で抱え込まず、学年部を「チーム」として機能させ、組織的に対応する体制を構築することが、生徒の安全と教員の疲弊防止の両立に不可欠であると再認識した。

③ 思春期の発達特性と「ケア」の視点

「思春期の揺れと成長を共に歩む」の講話からは、脳科学的アプローチによる発達段階や、トラウマ・インフォームド・ケア、愛着障害といった専門的な理解を深めることができた。生徒のタイプに応じた具体的な対応法を学んだことで、困難を抱える生徒へのアプローチに確

かな指針を得た。

講話の中で示された「大事にされた記憶、親身になってもらった体験は一生その子を支えます」という言葉は、教育の本質を突くものであり、非常に感銘を受けた。学年主任として、学年全体がこうした温かなまなざしをもって生徒に伴走できるよう、責任をもって職務に当たっていきたい。

【研修講座Ⅱ】

① 学年経営における組織マネジメントの要諦

学年経営の基礎として、ミドルリーダーである学年主任の役割は、学校のミッションに対する教職員の理解を促進させ、組織のパイプ役としてコミュニケーションを活性化させることにある。研修を通じ、主任は「監督」ではなく、生徒や担任と同じ目線に立つ「キャプテン」であり、周囲に「共に歩もう」と呼びかける存在であるべきだと強く実感した。

また、チームマネジメントの本質は「個々の弱みを無力化し、強みを最大限に発揮させること」にある。主任がすべてを背負い込むのではなく、担任との適切な役割分担とタイムマネジメントを意識し、組織全体で課題を解決する姿勢が不可欠である。学年部が「目指す生徒像」を共有し、全員が計画・実践に参画する「当事者意識をもった組織」の構築を目指すことが大切であると学んだ。

② キャリア教育の推進と「キャリア・パスポート」の活用

生徒が学ぶことと将来のつながりを見通し、変化の激しい社会を生き抜く力を育むキャリア教育の重要性を再確認した。特に「キャリア・パスポート」は、小・中・高の学びの軌跡をつなぐだけでなく、自己肯定感が低い傾向にある生徒にとって、自らの成長を可視化し実感させる極めて有効なツールである。

公開講演で学んだ具体的な活用事例を参考に、単なる記録に留めるのではなく、生徒理解の基盤として、また生徒自身が自己の変容を肯定的に捉え直す手段として、特別活動や各教科との連動を図りながら充実させていく必要がある。

③ 課題解決に向けた実践的アプローチ

各校の課題を共有する協議では、直面する「問題」を「解決すべき課題」へとポジティブに読み替える視点の重要性を学んだ。自校の持ち味や強みを再確認し、他校の実践例を取り入れることで、学年経営の新たな可能性を見出すことができた。

3. 研修を終えて

本研修を通して、たくさんの方々からご指導・ご助言をいただいたことに感謝している。今後は、研修で得た知見を糧に、学年経営における教職員間のコミュニケーションの活性化や、学年部全員で目標を共有し、役割分担を明確にしながら、生徒一人ひとりを大切にする支援体制の充実に生かしていきたいと考える。

道徳教育の現状と推進のための取組みについて

小澤 寿美人

研修の目標 高等学校における道徳教育について理解を深めるとともに、各校における道徳教育の実践的な推進力を身につける

内容

1 道徳の「特別の教科化」の背景

子どもたちを、いじめの加害者にも、被害者にも、傍観者にもしないために「いじめは許されない」ことを道徳教育の中でしっかりと学べるようにする必要がある。

道徳教育の抜本的充実が求められる背景

- ・ 深刻ないじめの本質的な問題に向き合う
- ・ 決まった正解のない予想困難な時代を生きる

心の成長が遅くなっているのではないか。そのために生徒一人一人に選択基準・判断基準をもたせる必要性があり、そのためにも、学校の教育活動全体で計画的にやらないと個人の職人技だけでは対応できない。

「考える」 ・ 主体的に・自分との関わりの中で

「議論する」 ・ 多様な考え方、感じ方と出会い、交流する必要がある

道徳教育とはどのようなものか

義務教育9年間で4つの視点と22の内容項目を手がかりに、継続的に、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることで道徳性を養い、よりよい生き方ができる子供を育てるために道徳科の授業が行われている。

2 道徳教育について

道徳性は、人間が他者とともによりよく生きていく上で大切にしなければいけないもので、学校における道徳教育においては、各教育活動に、①道徳的判断力②道徳的心情③道徳的实践意欲と態度を養うことを求めている。

- ① 道徳的判断力 善悪を判断する能力
- ② 道徳的心情 道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情
- ③ 道徳的实践意欲と態度 道徳的判断力や道徳的心情によって価値があるとされた行動をとろうとする傾向性

道徳性を養うこととは、判断力・心情・実践意欲態度を養うことで、道徳的価値の大切さを理解し、感じ取り、価値のある行動をとろうとすることである。

3 高等学校における道徳教育

高校生の発達段階において

どう生きれば良いか、生きることの意味は何かということについて思い悩む時期で、自己を確立し自らの人生観・世界観・価値観を形成し、主体性を持って生きたいという意欲を高めていくことが重要である。

高等学校における道徳教育のポイント

- ・学校の教育活動全体を通じて、全教師が協力して道徳教育を展開することが重要である。
- ・生徒が人間としての在り方生き方を考える機会を設ける。
- ・校訓、学校教育目標を軸とした道徳教育を展開する。

「道徳教育推進」の役割

- ・全体計画の作成
- ・家庭や地域社会との共通理解に関すること
- ・研修の充実に関すること

4 道徳教育の充実に向けて

現状

- ・高校で道徳教育を行う認識が薄い。
- ・個々の先生が各自で対応している
- ・従来の生徒指導にとどまっている

課題

- ・個別の指導をどのように共有し、同じ方向に向けるか
- ・在り方生き方を考える機会をどう設定するか

充実に向けて

- ・既に実践していることを共有し、つなげて実践する。
- ・校訓、学校教育目標を軸とした道徳教育を展開する。

定 時 制 課 程

1 重点目標・実施事項

重点目標	実施事項
1 校内研修の充実を図る。	1 相互授業参観、授業研究会、校内研修会を実施する。 教務部、校内LAN運用管理委員会との連携を密にする。 校務支援システムの利活用の情報を提供する。
2 授業改善に向けた情報の発信をする。	2 授業アンケートの内容を検討する。 ICT機器の利用の紹介を行う。

2 担当職員及び業務分担

職員構成	◎齊藤 芳徳 ○山岸 幸希
------	---------------

業務区分	業務内容	担当 (◎主担当)
総務	総括 (企画・調整)	◎齊藤
職員研修	高教研、センター研修、各種研修会・講習会等申込み	◎齊藤
	経験年次別研修	◎齊藤 山岸
	校内職員研修、研究授業実施計画	◎齊藤 山岸
	調査、統計	◎山岸 齊藤
研究紀要	研究紀要の編集	◎齊藤
資料整理	各種資料整理	◎齊藤 山岸

3 業務計画・研修計画

学期	月	業務等	研修等
1	4	業務分担、年間計画等の策定 総合教育センター研修講座申し込み 県高等学校教育研究会会員登録	
	5	授業参観の感想等集約	[授業改善]課題と取り組み
	6	授業アンケートの作成	授業参観旬間① 指導主事訪問
	7	授業アンケートの集計	生徒による授業アンケート①
2	8		
	9		[授業改善]取り組みの進捗状況
	10	授業アンケートの作成	
	11	授業参観の感想等集約	授業参観旬間②
	12	研究紀要の寄稿募集・依頼等 授業アンケートの集計	生徒による授業アンケート②
3	1	研究紀要の原稿集約	[授業改善]取り組みの達成状況
	2	研究紀要の編集	
	3	研究紀要の発行	

令和7年度授業改善重点事項について

定時制課程研修部

定時制課程では令和6年度に引き続いて、授業改善重点事項を次のように定め、取り組んだ。

1 課題

「主体的な学びを通して、社会で求められる資質・能力を育成する授業の工夫」
— その時間の課題と目標を理解し、見通しをもって主体的に学ぶ態度を養う —

2 課題の設定理由（生徒の実態）

本校（定時制課程）での学びについて、令和5年12月実施の学校評価アンケートでは、「授業はわかりやすく、楽しく学べる」、「授業で自分の考えをまとめたり、発表することがよくある」などの質問に対して「よくあてはまる」と「ややあてはまる」が回答のほとんど占めるなど、生徒の多くが授業を前向きに捉えていた。その一方で、1時間の授業を通して、また、その展開の場面場面において、何を学んでいるのか、何を身に付けようとしているのかを飲み込めないまま授業に臨み、何がわかり、何がまだわからないのか、自身の達成度を測れずにいる生徒の存在も想定された。

そこで昨年度、生徒が取り組むべき課題と到達すべき目標を理解し、見通しをもちながら授業に臨むことで、主体的、意欲的に取り組み、自身の理解度を客観的に意識するようになることを目指して、各教員が授業改善を実践し、効果を得たと考える。

本年度は、より多くの生徒に主体的な学びを結びつけられるよう、昨年度の実践で得られた成果の充実・発展を図ることとした。

3 目指す生徒の姿（具体的な取り組み）

- ① 何について学ぶのか、何ができるようになるのかを明示された「本時の目標」により、その時間全体の取り組みをイメージできる。
- ② 1時間を通しての流れがわかる工夫により、その時どの段階にあるかを把握しながら、授業に臨むことができる。
- ③ 振り返りの活動を通し、その時間に何を学び、何が身に付いたかを認識できる。

4 実践に際しての留意点

目標や授業の流れは、説明を一度するだけでなく、生徒が1時間を通して確認できるように工夫する。

5 各教員の取り組み

- 6月 相互授業参観（第1回）
- 7月 生徒授業アンケート
- 10月 「各自の現状（課題）」、「改善のための取り組み」の確認
- 10月 「進捗状況」の報告・提出
- 11月 相互授業参観（第2回）
- 12月 生徒授業アンケート
- 1月 「達成状況」の報告・提出

生徒に対して実施した授業アンケート1回目の結果を踏まえ、授業担当者が実践課題として「各自の現状（課題）」と「改善のための取り組み」を明確化し、授業改善に取り組んだ。

6 研修部の取り組み

相互授業参観での参観者の報告・感想が届き次第、または、生徒授業アンケートの回答が講座単位でそろい次第、研修部で逐次整理・集計し、結果を授業担当者がすぐに関覧できるようにした。

7 成果

取り組みの①「本時の目標」、②「流れ」、③「振り返り」をその授業1時間で完結させるだけでなく、復習を次時の導入と結びつけたり、授業の継続性・連続性を高める事例の報告が増えている。

[取り組み①]

課題を設定する以前から、「本時の目標」の明示についてはほとんどの授業で実践されていたが、重点事項の具体的な取り組みとして明示されたことを機に、多くの教員が、「流れ」、「振り返り」と結びつける工夫・実践を行い、相乗効果を得ていた。

[取り組み②]

明示された目標との一貫性や振り返りの方法・項目に結びつけるべく、授業の流れや指示の明確化などの見直しが進められている。

使い分けの仕方は教員により異なるが、黒板と電子黒板を組合せて、目標、全体の流れ、その展開で取り組む内容との関連がわかるよう工夫がなされている。

[取り組み③]

各時間ごとに振り返りの活動を設けることで、学習課題や授業の流れを意識しながら授業に取り組もうとする姿勢が高まっている。

多くの科目で振り返りシートを活用しており、生徒は自分の達成状況を意識できる。また、振り返りのみ数時間分をまとめたシートによって、前時（以前）と本時のつながりが把握できる。

振り返りを兼ねた小テストで理解度の高い生徒の学びの深さに対応した。

教師は生徒の理解が不十分な箇所の把握が容易になり、前時の振り返りをもとに定着を図る小テストを実施することで、復習を導入と結びつけ、継続性を高めるところに気付けるようになった。

授業アンケートと分析

研修部 山岸 幸希

1 目 的

- (1) 魅力があり、信頼される学校を目指すために、生徒による授業アンケートを通じて指導方法の改善を図る。
- (2) これまでの授業における生徒の意見や困難を感じている点を理解し、今後の授業改善に活用する。
- (3) これまでの授業への取り組みについて、生徒自身が自己評価をする機会とする。

2 実施内容

- (1) 対 象 全校生徒
0校時を含む全ての科目
- (2) 方 法 ChromeBookによるフォームへの回答
- (3) 期 間 第1回 令和7年7月14日(月)～18日(金)
第2回 令和7年12月2日(火)～9日(火)
- (4) 集計処理 研修部でアンケートの結果を集約し資料を作成

※ 1 下記の表はアンケートの回答を

1:全くあてはまらない, 2:あまりあてはまらない, 3:ややあてはまる, 4:よくあてはまる と扱い、質問ごとに全科目の平均をとったものと、各回答を選択した割合である。

2 質問の趣旨は生徒の学習への取り組みについてと、教員の授業についての2種類があるので平均値もそれに合わせて2種類に分けている。

授業アンケートの比較(各学年)

令和7年度授業アンケート集計結果(1年生)

期間	7月(回答数7人/科目数10)					12月(回答数7人/科目数10)				
	平均	回答の割合 [%]				平均	回答の割合 [%]			
		4	3	2	1		4	3	2	1
1. 授業に対して意欲的に取り組んでいますか？	3.7	70.0	30.0	0.0	0.0	3.7	78.3	20.3	1.4	0.0
2. 意見交換、学び合い、発表などに積極的に参加していますか？	3.5	51.4	41.4	7.1	0.1	3.5	65.2	17.4	17.4	0.0
3. 定期考査の準備や課題の提出を心がけていますか？	3.3	41.4	40.0	8.6	2.9	3.7	58.0	23.2	2.9	0.0
平均	3.5	54.4	37.1	5.2	1.0	3.6	67.2	20.3	7.2	0.0
1. 本時の目標が明確に示されていますか？	3.7	72.9	24.3	2.9	0.0	3.9	89.9	10.1	0.0	0.0
2. 1時間の授業の中でその時に何を学んでいるか分かる構成になっていますか？	3.7	70.0	30.0	0.0	0.0	3.8	91.3	8.7	0.0	0.0
3. 学習内容を振り返り、その時に何を学んだかわかる授業になっていますか？	3.6	61.4	35.7	2.9	0.0	3.6	65.2	24.6	8.7	1.4
平均	3.7	68.1	30.0	1.9	0.0	3.8	82.1	14.5	2.9	0.5
自由記述の項目 (授業のよい点・改善してほしい点)	<ul style="list-style-type: none"> ・意見交換や質問する時間がたくさんあるところ ・動画を見るからわかりやすい ・先生の豆知識が面白い 									

結果を受けて

7月から12月での変化として授業への取り組みについて「よくあてはまる」を選択した割合が10%以上上昇しているため、学習意識が向上していると考えられる。

授業については目標の明示や授業の構成が7月よりも「よくあてはまる」を選択した割合が20%近く増えていて、授業改善が進んだ様子が見られる。

令和7年度授業アンケート集計結果(2年生)

期間	7月(回答人数 6/科目数 15)					12月(回答人数 6/科目数 15)				
質問	平均	回答の割合 [%]				平均	回答の割合 [%]			
		4	3	2	1		4	3	2	1
1. 授業に対して意欲的に取り組んでいますか？	3.7	67.1	32.9	0.0	0.0	3.7	63.2	35.2	1.5	0.0
2. 意見交換、学び合い、発表などに積極的に参加していますか？	3.6	54.8	38.4	6.8	0.0	3.4	50.0	36.8	10.3	2.9
3. 定期考査の準備や課題の提出を心がけていますか？	3.7	57.5	32.9	0.0	0.0	3.4	35.3	44.1	7.4	0.0
平均	3.7	59.8	34.7	2.7	0.0	3.5	49.5	38.7	6.4	0.9
1. 本時の目標が明確に示されていますか？	3.8	76.7	21.9	1.4	0.0	3.7	70.6	27.9	1.5	0.0
2. 1時間の授業の中でその時に何を学んでいるか分かる構成になっていますか？	3.8	79.5	20.5	0.0	0.0	3.7	69.1	30.9	0.0	0.0
3. 学習内容を振り返り、その時に何を学んだかわかる授業になっていますか？	3.8	75.3	24.7	0.0	0.0	3.7	64.7	33.8	1.5	0.0
平均	3.8	77.2	22.4	0.4	0.0	3.7	68.1	30.9	1.0	0.0
自由記述の項目 (授業のよい点・改善してほしい点)	<ul style="list-style-type: none"> ・日常で活かせそうなことを学べるところ ・その日習った部分やそれを応用した問題が出て習ったことを再確認できること ・もう少しいろいろなスポーツをしたいです 									

結果を受けて

7月から12月にかけて全ての項目で数値が下がっている。特に、授業の構成や振り返りについての質問で「よくあてはまる」を選択した割合が約10%低下している。上記のもの以外で改善してほしい点への記述はなかったが、授業改善が求められる。

令和7年度授業アンケート集計結果(3年生)

期間	7月(回答人数7/科目数13)					12月(回答人数8/科目数13)				
質問	平均	回答の割合 [%]				平均	回答の割合 [%]			
		4	3	2	1		4	3	2	1
1. 授業に対して意欲的に取り組んでいますか？	4.0	95.9	4.1	0.0	0.0	3.9	92.8	6.0	1.2	0.0
2. 意見交換、学び合い、発表などに積極的に参加していますか？	3.9	87.7	11.0	1.4	0.0	3.8	89.2	8.4	1.2	1.2
3. 定期考査の準備や課題の提出を心がけていますか？	4.0	91.8	1.4	0.0	0.0	4.0	84.3	3.6	0.0	0.0
平均	4.0	91.8	5.5	0.5	0.0	3.9	88.8	6.0	0.8	0.4
1. 本時の目標が明確に示されていますか？	3.9	91.8	5.5	0.0	2.7	3.8	92.8	4.8	2.4	0.0
2. 1時間の授業の中でその時に何を学んでいるか分かる構成になっていますか？	3.7	89.0	5.5	2.7	2.7	3.8	89.2	9.6	0.0	1.2
3. 学習内容を振り返り、その時に何を学んだかわかる授業になっていますか？	3.7	84.9	8.2	4.1	2.7	3.9	86.7	13.3	0.0	0.0
平均	3.8	88.6	6.4	2.4	2.7	3.8	89.6	9.2	0.8	0.4
自由記述の項目 (授業のよい点・改善してほしい点)	<ul style="list-style-type: none"> ・説明、練習、確認の順番でしっかり復習もできるのが良い ・地域について学べるところ ・問題演習を増やしてほしい 									

結果を受けて

7月から12月にかけて特に大きな数値の変化は見られなかった。生徒の取り組みについて、「よくあてはまる」を選んだ割合は減少しているが、自由記述では問題演習を増やしてほしいと、一部生徒の学習への意欲の高さが見られた。復習の内容に対してなど改善してほしい点が挙げられていたので改善に努める。

令和7年度授業アンケート集計結果(4年生)

期間	7月(回答人数2/科目数9)					12月(回答人数2/科目数9)				
質問	平均	回答の割合 [%]				平均	回答の割合 [%]			
		4	3	2	1		4	3	2	1
1. 授業に対して意欲的に取り組んでいますか？	4.0	100	0.0	0.0	0.0	4.0	100	0.0	0.0	0.0
2. 意見交換、学び合い、発表などに積極的に参加していますか？	4.0	100	0.0	0.0	0.0	4.0	100	0.0	0.0	0.0
3. 定期考査の準備や課題の提出を心がけていますか？	4.0	100	0.0	0.0	0.0	4.0	100	0.0	0.0	0.0
平均	4.0	100	0.0	0.0	0.0	4.0	100	0.0	0.0	0.0
1. 本時の目標が明確に示されていますか？	4.0	100	0.0	0.0	0.0	4.0	100	0.0	0.0	0.0
2. 1時間の授業の中でその時に何を学んでいるか分かる構成になっていますか？	4.0	100	0.0	0.0	0.0	4.0	100	0.0	0.0	0.0
3. 学習内容を振り返り、その時に何を学んだかわかる授業になっていますか？	4.0	100	0.0	0.0	0.0	4.0	100	0.0	0.0	0.0
平均	4.0	100	0.0	0.0	0.0	4.0	100	0.0	0.0	0.0
自由記述の項目 (授業のよい点・改善してほしい点)	<ul style="list-style-type: none"> ・最近のニュースなどを学べるところ ・社会で使うような公式を知れる ・進行が早すぎる 									

結果を受けて

回答者が2人と少ないこともあり、7月と12月ともに結果が非常に偏った。自由記述では実生活で活かせる内容であることが中心に書かれていた。一方で授業がマンネリ気味であることや進行が早いという意見もあり、改善が必要である。

令和7年度授業アンケート集計結果(全学年)

期間	7月(回答人数 22/科目数 47)					12月(回答人数 23/科目数 47)				
質問	平均	回答の割合 [%]				平均	回答の割合 [%]			
		4	3	2	1		4	3	2	1
1. 授業に対して意欲的に取り組んでいますか？	3.9	79.4	20.5	0.1	0.0	3.8	80.6	18.1	0.8	0.5
2. 意見交換、学び合い、発表などに積極的に参加していますか？	3.8	67.5	26.1	5.0	1.4	3.7	71.7	18.6	8.4	1.3
3. 定期考査の準備や課題の提出を心がけていますか？	3.7	66.7	22.7	5.0	0.9	3.8	63.7	20.7	3.0	0.0
平均	3.8	71.2	23.1	3.4	0.8	3.8	72.0	19.1	4.1	0.6
1. 本時の目標が明確に示されていますか？	3.8	82.1	15.8	1.3	0.8	3.8	86.1	12.7	1.2	0.0
2. 1時間の授業の中でその時に何を学んでいるか分かる構成になっていますか？	3.8	81.2	17.1	0.9	0.8	3.8	84.8	14.8	0.0	0.4
3. 学習内容を振り返り、その時に何を学んだかわかる授業になっていますか？	3.8	76.1	20.9	2.1	0.9	3.8	75.1	21.5	3.0	0.4
平均	3.8	79.8	17.9	1.4	0.8	3.8	82.0	16.3	1.4	0.3

結果を受けて

7月の時点で全ての項目が3.7以上と高いこともあり7月から12月にかけて大きく変化したと言える数値はなかった。しかし、この表とは別で、各学年の数値を比較すると母数は少ないものの授業への取り組みは2年生で一度下がり、その後3,4年生と学年が上がるにつれて授業への意欲は上がっているように見える。また、1,2年生と比較すると3,4年生の方が自由記述への回答が多く、要望などを積極的に書いている。

1 はじめに

本校の定時制課程では、自立した生活を送るために必要なライフスキルや、友好的な対人関係を築くために必要となるソーシャルスキルの向上を目的として、分掌間で連携しながら次のような取組を行っている。

2 縦割り活動（主担当：特別活動部）

全校生徒が学年混合の4グループ（6人前後）に分かれ、1～2学期に8回実施している。企画を担当する職員はその都度替わるが、事前に全職員で本時の目標や進行案を見合い、活動の目的を共有した上で実施している。

〈重点的に育成する力〉

①相手の気持ちを察する力 ②協調性 ③主体性

〈テーマ〉

今年度の主なテーマは「衛生」と「食」。

〈実施内容〉

第1回「ヒーローインタビュー自己紹介」

目標：①メンバー同士で友好的に自己紹介することができる。

②ヒーローインタビュー、対話を通して相手の長所を理解することができる。

※第1回の活動を始める前に、ソーシャルスキルの自己チェックを実施。完璧さを目指すのではなく、どんなスキルを伸ばしたいか、自分で考える機会として設定。

第2回「将来お酒が飲める体質か、調べてみよう～アルコールパッチテスト～」

目標：①アルコールパッチテストを体験して、協力して確認し、自身の体質を判定する。

②将来、お酒とどのように向き合うかを考える。

第3回「食品添加物について考えよう」

目標：①メンバー同士で協力して無添加の食品をつくることができる。

②食を楽しむための工夫を話し合うことができる。

第4回「熱中症防止の手作りスポーツドリンクを作ろう」

目標：①班員同士で協力してスポーツドリンクを作ることができる。

②熱中症対策によい食べ物や飲み物について話し合うことができる。

第5回「身の回りをきれいに」（手洗いチェッカーで、洗い残しの確認）

目標：①身の回りに意識を向け、きれいな環境を整えることができる。

②グループでの話し合いに進んで参加することができる。

第6回「乾パンについて考える」

目標：①非常食の「乾パン」について理解を深め、避難所や家庭でのローリングストック等での食事を豊かにすることができる。

②トッピングやアレンジレシピをグループで話し合い、提案することができる。

第7回「身の回りをきれいにーお掃除編ー」

目標：①清掃を通して身の回りの環境を整えることができる。

②グループで協力して活動することができる。

第8回「巻いて包んで簡単おかず」

目標：①身近な材料を使って、見た目も楽しい簡単なおかずを作れるようになる。

②グループで協力してより良いものを作る。

〈振り返り〉

振り返りシートには、「できるようになったこと」「もっとできるようになりたいこと」や、ソーシャルスキルに関する振り返りを設ける。

2 コグトレウィーク（主担当：特別活動部、支援委員会）

〈時期〉 1回目：6月9～12日 2回目：11月12、13、17、18日

※SHR後の20分間で実施（1～4校時を5分ずつ短縮）

〈参考図書〉

「コグトレ みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング」（三輪書店 宮口幸治）、「1日5分！教室で使えるコグトレ 困っている子どもを支援する認知トレーニング122」（東洋館出版社 宮口幸治）を参考に問題を作成した。

〈出題内容〉

1～3日目：作業や認知に関する問題

迷路、絵探し、図形の回転、探し算、数まとめ、折られた紙の穴の位置を想像、間違い探し、話し言葉から書き言葉への変換等。

生徒がその場で丸付けをし、振り返りシートに記入する。

4日目：ソーシャルスキルに関する問題

ワークシートを用いて個別に考えた後、グループワークを行う。

Q アルバイト先で、他の従業員のミスを見つけてしまったら？

～コミュニケーションの成功例と失敗例を考える～

Q 新入社員として働く際、上司のちょっとした不正に気づいたら？

～何が起きているか、お互いにどのような気持ちか、改善策として集約した意見、自分が選んだ改善策とその理由を記述する～

3 アルバイト先訪問（主担当：支援委員会）

〈時期〉 1回目：6月9～12日 2回目：1月8～16日

〈内容〉 ・生徒のソーシャルスキル、勤務状況に関する情報交換

- ・学校行事等への配慮の依頼
- ・勤務状況報告書の作成依頼（2回目の訪問時）
- ・必要に応じて生徒と面談を実施

勤務状況については良い評価をいただくことが多い。学校とは違った立場から生徒を育ててくださっていることがわかり、地域との連携の大切さが感じられる。

4 ゆり支援学校とのワックスがけ（主担当：支援員会）

〈時期〉 1回目：9月24日 2回目：10月8日

〈参加者〉 本校生徒 2～4名（授業時間外の活動であるため、希望者のみ）

〈内容〉 ゆり支援学校高等部ビルクリーニング班の生徒から教わりながら、ポリッシャーを使用した床磨きやワックスがけの作業を一緒に行った。

同年代の生徒との貴重な交流の機会であるとともに、本格的な清掃の方法や道具の丁寧な扱い方を経験できる良い機会になっている。

5 今後に向けて

以上の取組の他、全校行事や保健講話のグループワーク等でも、縦割りの班編制を取り入れており、授業以外でも学年を超えて関わり合う姿がみられる。また、初めて体験する活動に対しては、ポジティブな感想がみられることが多い。

一方で、クラス単位よりも集団が大きくなることで、参加のハードルが高くなると感じている生徒もいる。日本におけるACE（小児期の逆境体験）については、家庭内よりも学校で受けた体験の方が多く、成人期の精神的健康を低下させることを示す研究結果がある（※）。いじめのみならず学習環境や教師側の対応によって情緒的に傷つける可能性があることも念頭におき、個々に合ったペースや参加可能な方法を探りながら、安心して活動できる場面を設定していく必要がある。

安心できる環境、または楽しいと思える人間関係の中で様々なスキルを身につけ、ポジティブな体験として生徒の中に刻まれることを目指して、今後も職員間で連携して取り組んでいきたい。

（※）参考文献

幼少期の逆境体験：成人の精神的健康と社会からの離脱への影響（2023）

Adverse childhood experiences: impacts on adult mental health and social withdrawal

Manabu Wakuta, Tomoko Nishimura, Yuko Osuka, Nobuaki Tsukui, Michio Takahashi, Masaki

Adachi, Toshiaki Suwa, Taiichi Katayama

（和久田学、西村倫子、大須賀優子、津久井伸明、高橋芳雄、足立匡基、諏訪利明、片山泰一）

他者との関わりをとおして未来を切り拓く力を養う取り組み

定時制課程 教諭 夏井 雅子

0 はじめに

秋田県高等学校定時制通信制教育研究大会が、1月9日（金）カレッジプラザを会場に開催された。県内の定時制・通信制の教員が集まって年1回開催されるもので、今年の参加者は約140名であった。本校定時制課程からは10人全員が参加した。午後の「研究発表・協議」の第3分科会（進路指導部会）で、本校で実践していることを発表する機会を得た。タイトルにある「未来を切り拓く力」は、今年度の学校経営方針で掲げられているものである。ソーシャルスキルやコミュニケーション能力は社会に出たとき特に重要であり、そのような力を身に付けさせることが進路指導の土台であると考え。本校で実践している他者と関わる活動について紹介したい。

1 他者と関わる活動を増やすきっかけ

令和3年度2月の職員会議で、生徒の実態と向上させたい力が話題となった。各クラスの人数が10人不足なので、人間関係は限定的で発展性に欠けるため、他学年の生徒と関わることで人間関係を広げさせようという意見が出た。そして、様々な人と関わる中でソーシャルスキルを身に付けさせたいと考えた。

さっそく令和4年度から、意識的に学年の枠を越えた活動を増やすこととした。

2 学年の枠を越えた活動

(1) 縦割り活動

全校生徒を4つの縦割りグループに分けて行う活動を、令和4年度から始めた。LHRや総合的な探究の時間を使って1年で10回実施していたが、令和5年度からは8回の実施になった。毎回担当教員が変わり、担当者が実施計画をたてる。

今年度は「衛生」または「食」を主なテーマにしたため、内容はやや限定的である。たとえば「食品添加物」「身の回りをきれいに」「巻いて包んで簡単おかず」など、教科の学習だけでなく、日常生活で大切な知識や技術、一般常識なども知ってほしいと考えて、計画をたてている。それぞれの担当が、自分の得意分野や特技を生かし楽しく学べるように工夫している。

令和7年度 縦割り活動

実施日	内容
4月18日（金）	ヒーローインタビュー自己紹介
5月21日（水）	将来お酒が飲める体質か、調べてみよう
6月27日（金）	食品添加物について考えよう
7月16日（水）	熱中症防止の手作りドリンク
8月27日（水）	身の回りをきれいに
9月24日（水）	「乾パン」について考える
10月31日（金）	身の回りをきれいに—お掃除編—
11月21日（金）	巻いて包んで簡単おかず

(2) 縦割り班をベースにした活動

ア 岩城遠足

岩城少年自然の家での野外炊飯をする行事で、今年度は6月に実施した。電車に乗る体験もさせたいということで、羽後本荘駅に集合して電車で移動をした。岩城少年自然の家では、班で協力しながら、かまどで火をおこし、薪をくべて、飯盒でご飯を炊いたりカレーを作ったりした。今年は、岩城少年自然の家のすぐ近くでクマの目撃情報があったため、野外炊飯は危険だということで急きょ屋内で調理となった。残念ではあったが、それでも生徒たちは調理から後片付けまで、班で分担しながら楽しそうにやっていた。食事後は体育館でレクリエーションを実施し、ボルダリングやスラックラインなどに挑戦した。

イ 球技大会

今年度は11月に実施した。今年の種目はバドミントンとバレーボールで、バドミントンは縦割り班の中で学年関係なくダブルスのペアを組んだ。バレーボールも縦割り班によるトーナメント戦を行った。少人数でも、大変盛り上がった。

ウ なべっこ

「なべっこ」と言っても外で調理するわけではなく、家庭科室で鍋を作るというものであり、今年度は12月に実施した。昨年度までは全員「だまこ鍋」を作っていたが、今年度は班ごとに好きな鍋を作らせることにした。前の週に事前学習を行い、班で話し合いをした。当日は買い物も自分たちでするので、班の中で買い出し担当になった生徒は、先輩と後輩が連れ立って徒歩で近くのスーパーに買い物に行った。買い出しに行かない生徒は家庭科室に残り、炊飯やナムル作りを行った。買い物から帰ってきたところで、全員で鍋の調理となった。先輩が後輩に指示を出したり、切り方を教えてあげたりなど、活発な交流が行われていた。

(3) 進路体験を語る会

今年度は12月に実施した。進路決定者が前に出て、それを1～3年生が取り囲むように座る。全員が大きな円になって、全員の顔を見られるような形である。司会の教員が様々な質問をし、進路決定者がマイクを渡しながら答えていく。進路決定者には事前に質問一覧を渡しておき、十分な準備をさせてから会をスタートした。たとえば「応募先をいつ頃どのように決めましたか」「決めた理由は何ですか」「面接ではどんなことを聞かれましたか」などの質問をした。1～3年生は先輩の生の声を聞き、「すごいな」「自分もがんばらなきゃ」など、人ごとではない自分ごととして進路を捉えることができた。

(4) インターンシップ報告会

毎年2年生が夏休み中にインターンシップを行っていて、将来の職業と関連した仕事や、興味・関心のある仕事を3日間体験する。その際、事前・事後学習を行うが、事後学習として体験したことや学んだことをまとめ、1年生に対して発表する機会を作っている。2年生は、体験を整理してまとめることで学びを深め、職業選択につなげていく。1年生は、翌年のインターンシップに向けて心の準備ができる。

(5) 卒業生講話

校内の先輩・後輩の交流だけでなく、卒業後地元で活躍している先輩を招いて話をしてもらおう行事も行っている。これまで、製造業に就いて頑張っている方、スーパーの店長をしている方、自動車整備士の方などに来ていただいた。年齢は、卒業してまだ3～4年の方から40代の方まで様々で、「なぜこの仕事を選んだか」「仕事のやりがい」「どんな高校生だったか」「高校時代にやっておくべきこと」などを話してもらおう。

今年は、画家として活躍している方に来ていただくことができた。作品を見せていただいたり、画家というあまりなじみのない職業について話していただいたり、大変興味深く有意義な時間であった。生徒は、定時制を卒業してこのような仕事に就けるという実感をもつことができる。また、定時制の先輩を誇りに思うことができれば、自分にも自信がつくのではないかと考える。さらに、先輩からの話は教師の話よりも心に響くようで、そのような点からも大切な行事である。

3 成果と課題

(1) 成果

以前は、「あの、髪の毛の長い3年生の人」というような言い方をしていたのが、きちんとお互いの名前を覚え、普段から話をする様子が見られるようになった。また、先輩が後輩に声をかけたり、行事の際にリードしてあげたりなど、面倒を見る様子が見られるようになった。わかりやすい言葉で言うと、「仲良くなった」と言える。

今年度の「なべっこ」当日も、予定した時間より早く終わりいつもより早い放課となったが、「体育館でスポーツをしたい」という声が生徒からあがった。生徒自ら教員と交渉して、他学年の生徒にも声をかけ、体育館でバレーボールをすることになった。自分たちがやりたいことを主張して自ら交渉すること、周りに声をかけて誘うこと、声をかけてくれたことに応えて参加すること、このようなことができる生徒を見て、大変頼もしく思った。こういった経験が積み重なることで、ソーシャルスキルが身に付いていくと考える。

(2) 課題

集団での活動に対して意欲を示す生徒と苦手意識がある生徒の両方がいる。苦手な生徒にどう対応するか、今後も共通理解を図り全職員で検討していく必要がある。

4 おわりに

これらの活動については、常に振り返り、検証し、より良い方法を模索していきたい。生徒が他者との関わりの中で未来を切り拓く力を身に付けられるよう、最大限の支援をしていきたい。

編集後記

今年度の『研究紀要』は、本校における職員研修と現場での実践報告を中心に構成いたしました。ご多忙のなかご寄稿くださいました執筆者の皆様、ならびに査読、編集にご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

常に新たな教授法が求められる教育現場にあつて、本稿が読者の皆様にとって確かな知見と新たなヒントを得る一助となれば幸いです。

研修班一同